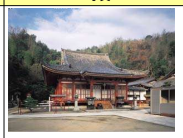
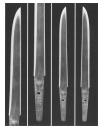
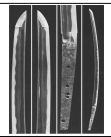
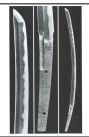
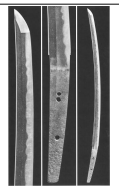
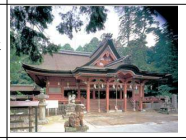
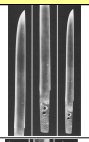
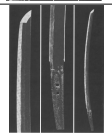
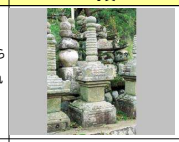
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	国宝（建造物）	明王院本堂	みょうおういんほんどう	1棟	福山市草戸町	明33.4.7 昭39.5.26（国宝指定）	本堂　桁行五間，梁間五間，一重，入母屋造，向拝一間，本瓦葺 厨子　一間，春日厨子，板葺 棟札　3枚（元和七年九月　2枚，元禄第三年十二月　1枚）		奈良県の西大寺末の律宗（りっしゅう）寺院である旧常福寺の施設として，鎌倉時代の元応3年（1321）に建立された。和様（わよう）を基調とし細部に禅宗様（ぜんしゅうよう）と大仏様（だいぶつよう）を交えた折衷様（せっちゅうよう）の建築である。尾道市の浄土寺本堂とならび，瀬戸内海地域の現存最古の密教本堂のひとつである。 本尊・木造十一面観音菩薩立像（重要文化財）を納める厨子（ずし）は，鎌倉時代の春日（かすが）厨子と呼ばれる形態であり，扉内側に蓮の彩色画が描かれている。		
国	国宝（建造物）	明王院五重塔	みょうおういんごじゅうのとう	1基	福山市草戸町	大2.4.14 昭28.3.31（国宝指定）	三間五重塔婆，本瓦葺	高さ29.14m	南北朝時代の貞和4年（1348）住持頼秀のとき，一文勧進小資（いちもんかんじんしょうし）を積んで造られた五重塔。純粋の和様でよく整った外観と雄大な手法によって，南北朝時代を代表する建築の一つと言われている。 内部は一重目中央に壇が設けられ，心柱が二重目から立ち上がる特異な構造である。壇周囲の壁板に真言八祖行状図，四天柱には金剛界三十七尊，なげし天井などには，唐草文・花鳥・飛天などが描かれているが，当初の彩色をこれほどよく残した塔は他に類例がない。 なお，中世の港町・市場町の遺跡である草戸千軒町遺跡（くさどせんげんちょういせき）は，この明王院の東側山麓を流れる芦田川の中州にあった。		
国	国宝（工芸品）	短刀　銘國光（名物會津新藤五）	たんとう〈めいくにみつ（めいぶつあいづしんとうご）〉	1口	福山市西町	昭和26年(1951)6月9日		刃長25.5　元幅2.4　元重0.6（cm）	鎌倉時代（13～14世紀）の作品。 この短刀は新藤五国光の作中，第一の名作といわれ，地刃ともに沸の冴えが見事である。 銘字は「左于北冠」といわれ，国字が逆となり，光字の上半が北字に似る。 『享保名物帳』によると，名は蒲生氏郷が所持したことに由来する。孫の忠郷まで伝来したが，森川半弥という者に下賜した。それを前田利常が金百枚で買い求め，元禄十五年四月，将軍徳川吉綱が前田邸に臨んだ際に郷の刀とともに献上し，正宗，吉光を下賜されたという。鞘書に「智幻院様御指之内」とあり，徳川家宣の子で早世した家千代の守刀であったことが知られる。 （写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』[ふくやま美術館編，平成20年]から引用）		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	国宝（工芸品）	太刀　銘筑州住左（江雪左文字）　附　打刀拵	たち〈めいちくしゅうじゅうさ（こうせつさもんじ）〉	1口	福山市西町	昭和26年(1951)6月9日		刃長78.2　反り2.7　元幅3.2 先幅2.1　鋒長3.8（cm）	南北朝時代（14世紀）の作品。 九州筑前の地に「左」（左衛門三郎という）が出現するまで，九州鍛冶は匂口の冴えない作風であったが，左の出現により冴えた沸（にえ）出来の作風へと一変する。左の有銘正真太刀はこの江雪左文字ただ一口である。号の由来は小田原北条氏の臣・板部岡江雪斎（いたべおか　こうせつさい）が所持したことによる。 江雪はのちに豊臣秀吉のお伽衆となるので，おそらくこの太刀を献じたと思われるが定かではない。やがて徳川家康の有に帰し，末子の紀州徳川頼宣に与えた。頼宣はこれを帯びて大坂両度の陣に参加したという。以来同家第一の名刀として伝来した。拵は鮫鞘の打刀拵であり，目貫の抱茗荷の紋所は江雪ものであろうか。かなり古い拵である。 （写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』[ふくやま美術館編，平成20年]から引用）		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	国宝（工芸品）	太刀　銘正恒	たち〈めいまさつね〉	1口	福山市西町	昭和27年(1952)3月29日		刃長77.6　反り2.6　元幅2.9 先幅1.6　鋒長2.5（cm）	平安時代（12世紀）の作品。 備前鍛冶の発生は古く，平安時代にはその存在が知られ，鎌倉時代に一文字派が成立する。それ以前の鍛冶を「古備前」と呼称して区別している。 この古備前正恒は太刀姿がいかにもよく，同工作中の傑作であるばかりでなく，同時代の代表作といえる作品である。阿波蜂須賀家に伝来した。 （写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』[ふくやま美術館編，平成20年]から引用）		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	国宝（工芸品）	短刀　銘左　筑州住	たんとう〈めいさ／ちくしゅうじゅう〉	1口	福山市西町	昭和27年(1952)11月22日		身長23.6　反り僅か　元幅2.3 茎長8.8（cm）	南北朝時代（14世紀）の作品。 この作は『光徳刀絵図』に「御物」とあり，すなわち太閤御物，豊臣秀吉が愛蔵したものであった。小振りな短刀であるが，左文字作中もっとも出来の良いものであり，同工の作風を遺憾なく発揮した傑作といえるものである。 （写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』[ふくやま美術館編，平成20年]から引用）		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	国宝（工芸品）	太刀　銘則房	たち〈めいのりふさ〉	1口	福山市西町	昭和28年(1953)3月31日		身長77.3　反り3.2　元幅3.0強 先幅2.2　鋒長3.0強　茎長22.7（cm）	鎌倉時代（13世紀）の作品。 則房は一文字派の中でも片山の地に移った片山一文字といわれ，逆がかった丁子刃の作風をもって知られる。片山の地は同名が備前にも備中にもあり，古くは備中とされていたが，今は長船近くの片山といわれている。 この作は逆がかった華やかな丁子刃の作風を示した則房作中の代表作で，身幅のある堂々とした太刀姿に，肉置きが豊かで，板目肌の美しい鍛えである。 徳川将軍家に長く伝来したもので，将軍家には近衛家から献じられたともいわれている。 （写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』[ふくやま美術館編，平成20年]から引用）		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	国宝（工芸品）	太刀　銘國宗	たち〈めいくにむね〉	1口	福山市西町	昭和28年(1953)11月14日		身長72.7　反り2.5　元幅3.0 先幅2.2　鋒長3.9　茎長20.0（cm）	鎌倉時代（13世紀）の作品。 国宗は通称を備前三郎といい，国真の三男と伝える。国宗はこの作のように華やかな丁子刃のものをもって典型作とするが，中には直刃（すぐは）調のもの，小丁子刃のものなどがあって，初二代説がとられる。中には「国宗　備前国住長船正和」銘の直刃のものがあって（東京国立博物館蔵），さらに研究を要するところである。 この作は華やかな国宗の作風を代表するもので，日光東照宮，鹿児島照国神社の国宗と並んで同工の最高傑作といえるものである。 （写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』[ふくやま美術館編，平成20年]から引用）		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	国宝（工芸品）	太刀　銘吉房	たち〈めいよしふさ〉	1口	福山市西町	昭和30年(1955)2月2日		身長74.0　反り3.5　元幅3.2 先幅2.2　鋒長3.6　茎長21.0（cm）	鎬造、庵棟、身幅広く、重ね厚く、鋒猪首。腰反高く踏張りある太刀姿。鍛小板目肌約み、乱映りあざやかに立つ。刃文大丁子重花交じり華やかに、匂口締まり、足業よく入り、腰もとの方沸ごころがある。帽子僅かに浅く乱込み、表裏ともほとんど焼詰めとなる。彫り物表裏棒樋を掻き流し、表に腰樋を掻き流して添える。茎生ぶ、先栗尻、反僅かにつく。鎺目筋違、目釘孔三、目釘孔の下棒樋と腰樋の間に小振りの二字銘。（以上，国指定文化財DB） （以上，過去の広島県HP） 福岡一文字吉房の作である。身幅が広く猪首鋒の堂々とした太刀で、鍛は福岡一文字によく見られるやや肌立つ小板目に映りがよく現れ、刃文も大房丁子や袋丁子刃とを交えた吉房の典型的なものである。鎌倉時代中期の一文字派最盛期における作風で、地刃健全である。 鎌倉時代（13世紀）の作品。 備前一文字派の吉房は華やかな丁子刃の作風をもって知られる代表的な刀工である。それでも極端に華やかなもの，比較的地味なものなどがあり，銘にも大振り，小振りと異なる。 この作は吉房作中最も華やかな作風を示し，同工の典型作である。徳川将軍家に伝来した。 （写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』[ふくやま美術館編，平成20年]から引用）		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（建造物）	安国寺釈迦堂 附　柱聯　1双	あんこくじしゃかどう	1棟	福山市鞆町後地	昭2.4.25	桁行三間，梁間三間，一重，入母屋造，本瓦葺		旧金宝寺仏殿と伝えられる建物。金宝寺は暦応2年（1339）足利尊氏によって備後安国寺とされた。慶長4年（1599）安国寺恵瓊（えけい）が大修理を加えた。鎌倉時代末期から南北朝時代初期（14世紀前半）の，質実な禅宗様仏殿の形式をよく残している。		
国	重要文化財（建造物）	福山城 　伏見櫓　1棟 　筋鉄御門　1棟	ふくやまじょう ふしみやぐら すじがねごもん	2棟	福山市丸の内	昭8.1.23	伏見櫓／三重三階，隅櫓，本瓦葺 筋鉄御門／脇戸付櫓門，入母屋造，本瓦葺		福山城は元和8年（1622）水野勝成（みずのかつなり）の命によって築かれた近世城郭である。伏見櫓や筋金御門など築城当時の建物が残されている。 【伏見櫓】将軍徳川秀忠の命によって伏見城から移された櫓。もと伏見城「松の丸東やぐら」であった。本瓦葺・白壁の三重三階櫓で，横長・窓2階の上に正方形の望楼を乗せたような外観である。慶長年間の貴重な城郭建築遺構である。 【筋鉄御門】伏見城からの移築と伝えられるが，築城時の新造とも考えられている。柱のかどに筋鉄を施し，とびらに十数条の筋鉄を打ちつけてあるためその名が生まれた。		関連施設：福山城博物館（084-922-2117）
国	重要文化財（建造物）	沼名前神社能舞台	ぬなくまじんじゃのうぶたい	1棟	福山市鞆町後地	昭28.10.20（県指定） 昭28.11.14	桁行一間，梁間一間，一重，切妻造，妻入，柿葺，屋根はパネル式		もと伏見城にあった組立式能舞台を水野勝成が福山へ移したと伝えられる。万治年間（1658～1661），水野氏が神社に寄進し，元文3年（1738）現在のような固定式とされた。仕口はすべて柄差し・込栓打，屋根はパネル式であり，各部材に番号・符号が残るなど，随所に組立式であった当時の様式がみられる。桃山時代から江戸時代初頭（16世紀末～17世紀前半）の他に類例のないものである。		
国	重要文化財（建造物）	磐台寺観音堂 附　棟札　3枚	ばんだいじかんのんどう	1棟	福山市沼隈町能登原	昭30.9.28（県指定） 昭31.6.28	桁行三間，梁間二間，背面一間，通庇，一重，寄棟造，庇葺おろし，本瓦葺		安土桃山時代の元亀元年（1570）に毛利輝元によって建てられたと伝えられる。阿伏兎（あぶと）岬の高さ10m余の岩頭に建ち，自然と調和して見事な景色をつくりあげている。 　禅宗伽藍には珍しい和様で，外部は丹塗（にぬり）で，内部格天井には極彩色で藤井松林が百花図を描いている。当初の平面は正四角形であるが，寛文年間（1661～1673）に堂後方の奥行一間を付け足したという。 ※藤井松林（ふじいしょうりん）…江戸時代後期の画家		
国	重要文化財（建造物）	吉備津神社本殿	きびつじんじゃほんでん	1棟	福山市新市町宮内字上市	昭40.5.29	桁行七間，梁間四間，入母屋造，向拝付，檜皮葺		江戸時代初期の慶安元年（1648）福山藩主水野勝成によって建てられたと伝えられる。比較的大きいことと備後・安芸地方によある「余間造り」の平面を持つことを地方的特色としている。正面に千鳥破風・軒唐破風を持った堂々とした江戸時代初期の建築でありながら，室町の風格と桃山彫刻を具備した優秀な墓殿（かえるまた）を備えている。勾欄（こうらん）の擬宝珠（ぎぼし）の刻銘及び文書により慶安元年建立が分かるなど，時代考証の尺度としても価値がある。		関連施設：備後一宮吉備津神社宝物館（0847-51-3395）
国	重要文化財（建造物）	太田家住宅 　主屋　1棟 　炊事場　1棟 　西蔵（附棟札1枚）　1棟 　釜屋　1棟 　南保命酒蔵　1棟 　北保命酒蔵（附棟札1枚）　1棟 　東保命酒蔵（附棟札1枚）　1棟 　北土蔵　1棟 　新蔵　1棟 　附　茶室　1棟 　　高塀　1棟	おおたけじゅうたく	9棟	福山市鞆町鞆	平3.5.31	主屋／桁行14.7m，梁間12.9m，二階建，南面入母屋造，北面切妻造，東南西各面庇付，本瓦葺 炊事場／桁行4.1m，梁間6.0m，北面庇付，二階建，南面入母屋造，北面切妻造，本瓦葺 西蔵／土蔵造，桁行7.3m，梁間6.0m，二階建，切妻造，本瓦葺 釜屋／土蔵造，桁行6.0m，梁間5.0m，二階建，切妻造，本瓦葺 南保命酒蔵／土蔵造，桁行13.8m，梁間5.9m，二階建，切妻造，妻入，本瓦葺 北保命酒蔵／土蔵造，桁行15.1m，梁間5.9m，二階建，切妻造，本瓦葺 東保命酒蔵／土蔵造，桁行14		鞆の名産品・保命酒の製造を行っていた中村家の旧宅で，後に太田家の所有となった。江戸時代，18世紀後半から19世紀前期までの建物で構成される。敷地の東西隅に東向きに主屋が建ち，通り沿いに敷地を囲うように附属屋が建つ。主屋の北側に新蔵が建ち，その間を高塀でつなぎ，南側は主屋の西に炊事場，湯殿が，西側は南から西蔵，釜屋，土塀，南保命酒蔵，北保命酒蔵が，北側には北保命酒蔵と北土蔵が並ぶ。敷地を囲むように土蔵が建ち並ぶ姿は壮観で，江戸時代中期から後期（17世紀後半～19世紀前半）にかけて酒造業で栄えた商家の構えをよく残しており，鞆の歴史的町並みを成す町屋として貴重な民家である。		内部公開（有料、問合せ先：084-982-3553）
国	重要文化財（建造物）	太田家住宅朝宗亭 　主屋　1棟 　門屋　1棟 　離屋　1棟	おおたけじゅうたくちょうそうてい	3棟	福山市鞆町鞆	平3.5.31	主屋／桁行13.8m，梁間10.0m，一部二階，西面切妻造，東面入母屋造，妻入，南東北各面庇付，本瓦葺 門屋／桁行5.9m，梁間2.6m，二階建，切妻造，西面庇付，本瓦葺 離屋／桁行6.0m，梁間7.9m，二階建，入母屋造，北面切妻造，西面庇付，本瓦葺		太田家住宅朝宗亭は，本宅と道路をはさんで東側に建てられた別宅で，藩主の来訪の際に使用されていた。敷地の西側道路に面して門屋と離屋が並び，門屋の奥に主屋が建てられている。主屋，門屋とも江戸時代，享和元年（1801）頃の建設と考えられる。主屋の東と南は港に面した庭となっていて，前望が開けている。座敷などの造りも良く，本宅ともに鞆の町並みの主要部を構成する町家として価値が高い。		
国	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音立像（伝僧最澄作）	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1躯	福山市草戸町	明32.8.1	一木造	像高142cm	一木彫り。平安時代初期（9世紀）の作品で，台座も平安時代（794～1191）の作と考えられる。 　明王院本堂の本尊として厨子に納められる。伝教大師の一刀三礼の作と伝承されている。 　等身像で，頭上の十一面は後補が多いが，主体部は造立当初のものである。彩色は剥落しているが，深い彫りと強い線，均整のとれた姿態，柔和な面相と優麗な気品，また天衣（てんね）の翻転（はんてん）も巧みである。		

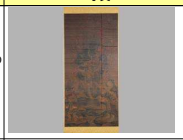
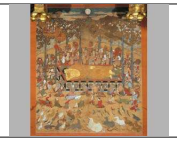
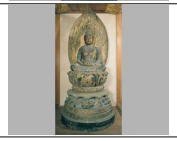
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来及両脇侍立像（本堂安置） 中尊像内に金胎五仏等種子及び文永十一年二月九日始，大仏師覚尊の銘がある 附　像内納入品 紙本阿弥陀経　6巻（血書1，墨書5，包紙添）文永十一年三月六日寛鏤の記がある 紙本墨書善光寺如来造立勧進帳　1通 紙本墨書念仏帳包紙添　1冊 紙本念仏記　3通（血書1，墨書2）内一通に文永十一年三月八日とある 紙本墨書願文　1通 袈裟　1領 横笛　1管 短刀柄付　1口 銅製鈴　1箇 紙胎漆塗箱　1合（以上中尊分） 紙本墨書仁王般若経　弘長二年寛鏤とある（左脇侍分） 珠数　1連（右脇侍分）	もくぞうあみだにょらいおよびりょうわきじりゅうぞう	3躯	福山市鞆町後地	昭17.12.22 昭43.4.25（像内納入品の一部を追加指定）	寄木造，漆箔，玉眼	本尊の高さ170cm，脇侍の高さ130cm	鎌倉時代，文永11年（1274）の作。 空蔵房寛覚ら三人が鞆に入港した船の乗客乗員など多くの人たちから勧進，平頼影を大壇那とし，大仏師覚尊によって造られ，金宝寺（安国寺の前身）に納められた。 一光三尊形の巨大な舟形光背（高さ306cm）を用いた善光寺如来である。善光寺如来は長野善光寺の像を模して鎌倉時代に盛んに作られた。その多くは銅製の小像であり，この像のような大きさのものは珍しい。 昭和24年（1949）に修理された際，中尊胎内から願文，勧進帳，血書も含む阿弥陀経6巻，般若心経1巻，念仏紙2枚，名号並びに和歌記入の冊子1冊，一貫張り被蓋黒漆塗箱一合（中に毛髪3包あり），紙包27包（1包は毛髪のみ，他は毛髪と舎利）などが発見された。また脇侍観音胎内からも仁王般若経上下2巻などが発見され，当時の熱烈な信仰心を明らかにした。		
国	重要文化財（彫刻）	木造法燈国師坐像 附　水晶五輪塔（小箱添）1箇 紙本墨書梵字真言並仏眼禅師偈文　1通 建治元年十二月十八日覚心トアリ 紙本墨書仏像修理記　1通 寛文四年三月十五日トアリ	もくぞうほうとうこくしざぞう	1躯	福山市鞆町後地	昭17.12.22	寄木造，玉眼	高さ84cm	鞆安国寺に伝わる木像。寄木造，玉眼入り。 鎌倉時代（1192～1332）に盛んに作られた祖師像のひとつである。法澄国師は禅宗の僧侶であり，安国寺開山とされている。この像は建治元年（1275）法澄69才の時の像で，極めて写実的である。なお，法澄の像は和歌山県にも伝えられている。 像内には水晶五輪塔などが納められていた。水晶五輪塔は高さ6.7cm，鎌倉時代の作と推定されている。		
国	重要文化財（彫刻）	木造狛犬	もくぞうこまいぬ	3躯	福山市新市町宮内	昭17.12.22	寄木造，漆箔	像高／（阿）78cm，（吽）80cm，82cm	平安時代（794～1191）の作と思われる。 狛犬は，宮中や神社に置かれた守護獣の像で，獅子と狛犬の組合せは平安時代前期に確立したと思われる。一対でそれぞれ阿（あ）吽（うん）をあらわしたものを一対とするのが一般的である。 本品はいづれも対をなすものではなく，かつて対をなしていたものは，何らかの経緯で失なわれたのであろう。 吉備津神社蔵（東京国立博物館に貸出中）		
国	重要文化財（工芸品）	毛抜形太刀 銘備州尾道五阿弥長行天文廿四年六月吉日吉備津宮奉寄進御太刀（二字不明）次郎左工門尉忠吉拵付	けぬきがたたち	1口	福山市新市町宮内	大4.3.26	鎬造，庵棟，腰反り，鍛え板目，刃文直刃	刃長60.8cm，反り2.3cm	吉備津神社に伝わる四口の毛抜形太刀の一口。戦国時代の天文24年（1555）の作で，尾道の刀工五阿弥長行の作である。茎（なかご）に毛抜形の透しをする平安時代（794～1191）の同種太刀の模古作である。 鎬造（しのぎづくり），庵棟，腰反りで鍛えは板目，刃文は直（すぐ）刃である。		岡山県立博物館に寄託 関連施設：備後一宮吉備津神社宝物館（0847-51-3395）
国	重要文化財（工芸品）	毛抜形太刀 銘備州尾道五阿弥長行天文廿四年六月吉日吉備津宮奉寄進御太刀（以下不明）	けぬきがたたち	1口	福山市新市町宮内	大4.3.26	鎬造，庵棟，腰反り，鍛え板目，刃文直刃	刃長60.2cm，反り2.8cm	吉備津神社に伝わる四口の毛抜形太刀の一口。戦国時代の天文24年（1555）の作で，尾道の刀工五阿弥長行の作である。茎（なかご）に毛抜形の透しをする平安時代（794～1191）の同種太刀の模古作である。 鎬造（しのぎづくり），庵棟，腰反りで鍛えは板目，刃文は直（すぐ）刃である。		岡山県立博物館に寄託 関連施設：備後一宮吉備津神社宝物館（0847-51-3395）
国	重要文化財（工芸品）	毛抜形太刀　銘正光 拵付（長さ61.6cm）	けぬきがたたち	1口	福山市新市町宮内	大4.3.26	鎬造，庵棟，腰反り，鍛え板目，刃文直刃	刃長61.6cm，反り2.5cm	吉備津神社に伝わる四口の毛抜形太刀の一口。戦国時代（16世紀）の作で，三原鍛冶のひとり・正光の作である。茎（なかご）に毛抜形の透しをする平安時代（794～1191）の同種太刀の模古作である。 鎬造（しのぎづくり），庵棟，腰反りで鍛えは板目，刃文は直（すぐ）刃である。		岡山県立博物館に寄託 関連施設：備後一宮吉備津神社宝物館（0847-51-3395）
国	重要文化財（工芸品）	毛抜形太刀　銘正光 拵付（長さ61.5cm）	けぬきがたたち	1口	福山市新市町宮内	大4.3.26	鎬造，庵棟，腰反り，鍛え板目，刃文直刃	刃長61.5cm，反り2.3cm	吉備津神社に伝わる四口の毛抜形太刀の一口。三原鍛冶のひとり・正光の作で，茎（なかご）に毛抜形の透しをする平安時代（794～1191）の同種太刀の模古作である。 鎬造（しのぎづくり），庵棟，腰反りで鍛えは板目，刃文は直（すぐ）刃である。		岡山県立博物館に寄託 関連施設：備後一宮吉備津神社宝物館（0847-51-3395）
国	重要文化財（工芸品）	太刀　銘國清	たち〈めいくにきよ〉	1口	福山市西町二丁目　ふくやま美術館	昭和25年(1950)8月29日			鎌倉時代（13世紀）の作品。 京粟田口に鍛冶が早い時期から存在したのは『宇治拾遺物語』に「あはたの鍛冶」とあることからも推測できる。鎌倉初期に名工六兄弟を輩出したと伝える。 国清は六兄弟の四男というが，現在作品はごく少なく，作風はほかの粟田口鍛冶に相通じるものである。この作は古雅な健全な作で，ほとんど生ぶ茎で雉子股となるが僅かに伏せている。江戸時代には秋田佐竹家に伝来した。五代将軍徳川綱吉から天和元年（1681）に三代佐竹義処（よしずみ）が賜ったものである。 （写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』［ふくやま美術館編，平成20年］から引用）		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	重要文化財（工芸品）	太刀　銘備前國長船兼光　延文三年二月日	たち〈めいびしゅうおさふねかねみつ／えんぶんさんねんにがつひ〉	1口	福山市西町二丁目　ふくやま美術館	昭和27年(1952)7月19日		身長88.8　反り2.3　元幅3.6　先幅2.5　鋒長5.6　茎長26.0（cm）	南北朝時代・延文3年（1358）の作品。 備前兼光は長船鍛冶の正嫡系で南北朝時代に活躍している。作風は勁乱の影響を受け，父景光風のものから沸（にえ）づいた弯（のた）れ刃のものへと大きく変化している。 この作は延文三年の年紀があり，時代の様相をよく示した，身幅が広く寸法の長い大太刀である。刃文は沸づいた直刃（すぐは）で地沸がよくつく。 上杉謙信，景勝ともに長寸の太刀を好んだと伝えるように，同家伝来の特色ある一口で，中ほどに刃こぼれがあり戦場での働きを窺わせる。 （写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』［ふくやま美術館編，平成20年］から引用）		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）

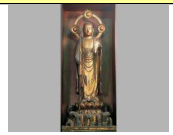
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（工芸品）	短刀　銘光包	たんとう〈めいみつかね〉	1口	福山市西町二丁目　ふくやま美術館	昭和28年(1953)11月14日			鎌倉時代（13～14世紀）の作品。 光包という刀工は京来派の国俊の弟子という。しかし，作品に「来」を冠したものはなく，一説に備前長光の弟子ともいわれる。 作風は，地鉄（じがね）のよくつんで冴えた来国俊に近いものとなり，小沸（こにえ）のよくついた直刃（すぐは）を焼く。この作は奥州仙台伊達家に伝来したもので，本作と越前松平家に伝来（現東京国立博物館蔵）したものが双璧である。ほかに名物「乱光包」があり，こちらは備前景光風の片落互の目刃を焼いている。 〔写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用）		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	重要文化財（工芸品）	太刀　銘備前國長船盛景	たち〈めいびぜんおさふねもりかげ〉	1口	福山市西町二丁目　ふくやま美術館	昭和28年(1953)11月14日			南北朝時代（14世紀）の作品。 盛景は備前長船鍛冶であるが，古来「大宮備前」を呼称され，京大宮から備前へ移住した一派の刀工と伝えられた。しかし国盛を祖とする大宮物の系譜と盛景は合致せず，現在では真長－近景－義景－盛景と繋がる長船傍系鍛冶とみられている。 盛景は延文（1356～）から明徳（1390～）まで活躍しているが，この作は地刃ともに同工の特色を顕著にした典型作であり，かつ健全である。 〔写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用）		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	重要文化財（工芸品）	短刀　朱銘貞宗（名物朱判貞宗）　本阿（花押）	たんとう〈しゅめいさだむね（めいぶつしゅばんさだむね）／ほんあ（かおう）〉	1口	福山市西町二丁目　ふくやま美術館	昭和29年(1954)3月20日			南北朝時代（14世紀）の作品。 相州貞宗は彦四郎と称し，五郎入道正宗の実子とも養子とも伝え，作風は正宗に近似するが有銘の作は存在しない。一説に江州高木の出身で，佐々木源氏の一族ともいう。 この享保名物「朱判貞宗」の名は，本阿弥光室の朱判があることから名付くという。地沸（じにえ）のついた鍛え上沸の深い弯（のた）れ調の乱刃は同工作の中でも抜群の出来である。帽子刃が常と異なり丸く返るが，地刃の出来の見事さを評価して貞宗以外には極められないものであろう。 名物帳には本阿弥光刹が所持し，土井大炊頭に移り，徳川秀忠から前田利常が下賜されたとあり，代八千貫という。 〔写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用）		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	重要文化財（工芸品）	刀　無銘伝来國光	かたな〈むめいでんらいくにみつ〉	1口	福山市西町二丁目　ふくやま美術館	昭和31年(1956)6月28日			鎌倉時代（13～14世紀）の作品。 京の「来」鍛冶は諸書には国頼なる者を始祖と記しているが，実質的にはその子と伝える国行が祖であろう。国俊，国光，国次と続くが，国光・国次の後は南北朝の禍乱のためか，来派は急速に衰退してしまう。来国光は伝統的直刃の作に加えて，相州伝の影響によるものか乱刃のものとがある。この作は前者の作風で，沸（にえ）が細かよくついた同工の特色をよく表している。鞘書には「代金七拾枚折紙有」を記されており，かなり評価の高かったものであることが分かる 〔写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用）		関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345）
国	重要文化財（考古資料）	広島県草戸千軒町遺跡出土品 土器・土製品　1400点 木製品　632点 墨書木製品　193点 漆器　79点 石製品　310点 金属製品　238点 骨角製品　76点 繊維製品　2点	ひろしまけんくさどせんげんちょういせきしゅつどひん		福山市西町　県立歴史博物館	H16.6.8			福山市を流れる芦田川下流の河川敷に広がる中世の港湾都市跡からの出土品である。土師質土器等の日常雑器から中国・朝鮮産を含む各種の陶磁器，下駄や羽子板，付札等の木簡や呪符，漆器等の木製品，刀装具や手斧・銅鏡等の金属製品，笄・根付等の骨角製品で構成される。これらは，衣食住の全体に係わる当時の庶民生活を復元する上で貴重な内容を持っている。		関連施設：広島県立歴史博物館（084-931-2513）
国	重要文化財（歴史資料）	菅茶山関係資料	かんちゃざんかんけいしりょう	5,369点	福山市西町二丁目4－1　広島県立歴史博物館	H26.8.21			菅茶山（1748～1827）は，教育者として備後国神辺に黄葉夕陽村舎を開設して人材の育成に尽力するとともに，漢詩人として活躍した。その詩集『黄葉夕陽村舎詩』は同時代人に高く評価され多くの学者・文人と交わりを結んだ。 本資料は，茶山が詠んだ漢詩集の草稿などの各種草稿類をはじめ，日記類，典籍類，書状類，茶山に贈られた書画・器物（きぶつ）類などの一括資料である。 菅茶山の儒者，漢詩人としての思想・思索及びその形成過程を知ることのできる最も重要な資料であるとともに，茶山を中心とする近世の文人の交友を具体的に示す貴重な資料である。		関連施設：広島県立歴史博物館（084-931-2513）
国	重要伝統的建造物群保存地区	福山市鞆町伝統的建造物群保存地区	ふくやましともまちでんとうてきけんぞうぶつぐんほぞんちく		福山市鞆町	【選定年月日】平成29年11月28日			福山市鞆町伝統的建造物群保存地区は，中世の骨格を引き継ぎ江戸中期までに整えられた地割に，江戸時代からの伝統的な町家が社寺建築や石垣等の石造物，港湾施設等と一体となって良好に残り，瀬戸内の港町としての歴史的風致を良く伝えており，我が国にとって価値が高い。		
国	重要有形民俗文化財	はきものコレクション 下駄類800点，草履類567点，草鞋類267点，藁沓類213点，沓類145点，足袋類77点，足桶6点，かんじき類88点，踏俵類11点，スキー・スケート類39点，竹馬・缶下駄類15点，その他（引札・看板）36点	はきものこれくしょん	2,266点	福山市松永町	昭60.4.19			はきものコレクションは約30年間の歳月をかけて，広く全国各地から収集されたもので，形態を主軸に用途を加味して分類し，関係の製作用具・交易用具等を加えて体系的にまとめたものである。コレクションのうちでも特に充実しているのは，はな（鼻）緒はきものとしての下駄類・草履類・草鞋（わらじ）類と被甲はきものとしての藁沓（わらぐつ）類・沓（くつ）類・足袋（たび）類である。はな緒はきもののうち，下駄類には，一木製の各種の下駄をはじめ，雪国で使用されてきた雪下駄，田の代掻（しろか）き，肥料の踏み込み様などに使われてきた田下駄，また草履類には多用な足半（あしなか）草履を含む。被甲のはきものとしては，藁沓類や，木製，絹糸編みなどの和沓，明治以降に普及を見た洋靴，また，足袋類には紐付きの足袋，コハゼ掛け足袋，直（じか）足袋，底のない甲掛（こうがけ）の類が収集されている。その他，水中で履く足桶類，雪氷上の歩行用につけるかんじき類，積雪を踏むのに使う踏俵類など各地で使用されてきたものが含まれており，全国的に概観できる資料として貴重である。		関連施設：福山市松永はきもの資料館（084-934-6644）
国	特別史跡	廉塾ならびに菅茶山旧宅	れんじゅくならびにかんちゃざんきゅうたく		福山市神辺町川北字七日市北側　上地域内に介在する水路敷	昭9.1.22 （史跡指定） 昭28.3.31 （特別史跡指定）		2,567.1㎡	菅茶山の私塾「廉塾」と居宅。 菅茶山は，寛延元年（1748），神辺宿に生まれ，教育者・漢詩人・漢学者として知られる。天明元年（1781）に郷里で開塾し，その塾とそれに附属する田地を福山藩に献上し，藩の郷塾となった。公式には神辺学問所と呼ばれたが，一般には廉塾と称した。 敷地内の講堂・寮舎は，桟瓦葺（さんがわらぶき），平屋建て，居宅は，桟瓦葺，2階建てで近世の地方における教育施設として数少ない例である。		関連施設：菅茶山記念館（084-963-1885）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	史跡	一宮（桜山慈俊挙兵伝説地）	いちのみや（さくらやまこれとしきょへいでんせつち）		福山市新市町宮内字上市　吉備津神社境内	昭9.3.13			城の遺構は桜山という独立丘陵全体に広がっている。周囲の谷部には館跡と思われる平坦地があり，土師質土器が散布している。 元弘元年（1331）の元弘の変の際に，後醍醐天皇による鎌倉幕府討伐の動きに呼応した備後の豪族宮氏の一族桜山四郎入道慈俊（これとし）は，一宮（吉備津神社）の背後の桜山城に拠った。しかし，乱の後は，慈俊は一族郎党とともに翌2年（1332），吉備津神社に放火し自殺したと伝えられる。西方，鳶尾（とびお）山頂に慈俊を祀った社がある。		関連施設：備後一宮吉備津神社宝物館（0847-51-3395）
国	史跡	福山城跡	ふくやまじょうあと		福山市三之丸町，松山町	昭39.2.7			元和5年（1619），福島正則の移封の後をうけた水野勝成（みずのかつなり）は，はじめ神辺（かんなべ）城にいたが，まもなく福山に築城をはじめ，元和8年（1622）入城した。水野氏の後嗣が絶えた後も，松平氏・阿部氏の居城とされたが，明治維新に至って建築物の多くは取り除かれた。城は丘陵の先端部を占め，北部背面を切通しとし，三方に堀や郭（くるわ）を設けていたが，現在は外郭はほとんど市街地化されている。しかし本丸，二ノ丸はよく規模をとどめ，天守閣は空襲で焼失したが，昭和41年（1966）復元，地階を有する天守台は，江戸時代初期（17世紀初め）の天守閣の好例とされている。そのほか本丸と二の丸の石垣や，伏見城松の丸から移建された三層櫓や鉄筋御門などが残っている。		関連施設：福山城博物館（084-922-2117）
国	史跡	宮の前廃寺跡	みやのまえはいじあと		福山市蔵王町宮の前	昭44.5.27			福山市の北東，かって深津湾岸の南面する丘陵の中腹に位置し，現在は八幡神社の境内となっている。古くから塔の心礎が注目されていたが，戦後の数次にわたる調査によって，東に塔跡，西に金堂跡が検出された。その他の遺構は，立地からみると存在しない可能性がつよい。塔跡は一辺12.6mの正方形で，南辺は[84a6]積み（せんづみ）化粧，北辺は乱石積みを交える。柱間は6.66m（2.24尺）で，五重塔か三重塔かは不明である。金堂跡は東西25.3m，南北15.5mで，南辺は[84a6]積み化粧，北辺は乱石積みを交える。奈良時代前期末から後期（8世紀）の瓦類のほか，金堂跡から[84a6]仏，塔跡から「紀臣和古女」をはじめとする人名をヘラ描きした文字瓦の出土が注目される。		
国	史跡	朝鮮通信使遺跡 鞆福禅寺境内	ちょうせんつうしんしいせきともふくぜんじけいだい		福山市鞆町鞆字古城跡	平6.1011			鎖国時代の日本（徳川幕府）にとって朝鮮（李氏朝鮮）は正式な外交のある唯一対等な国家であり，将軍の代替わりのたびに通信使とよばれる使節が訪れた。通信使の経路はほぼ一定しており，鞆には計12回の通信使が宿泊している。福禅寺は弁天島・仙酔島に対する景勝の地にあり，鞆に寄港した朝鮮の正使・副使・従事などの宿所に当てられた。正徳元年（1711）李邦彦の「日東第一形勝」の額をはじめ，寛延元年（1748）洪景海の書する「対潮楼」の書幅など多くの資料が残る。 対潮楼は元禄年間（1688～1703）の創建と言われ，梁間六間，桁行六間半，単層入母屋造り，本瓦葺きの建物である。		
国	史跡	二子塚古墳	ふたごづかこふん		福山市駅家町新山	平21.7.23			二子塚古墳は，広島県の東部，備後地域に所在する標高50m前後の低丘陵上に所在する前方後円墳である。 発掘調査の結果，墳丘長68m，墳丘の周辺には幅1.6～4m，深さ1.8m程度の周溝が全周し，それを含めた総長は73.4mになり，備後地域を代表する大規模前方後円墳であることが明らかとなった。 埋葬施設は，前方部と後円部に横穴式石室が1基ずつある。後円部のものは両袖式で，全長14.9mと吉備有数の規模を誇る。石棺は播磨の竜山石製の組み合わせ式石棺であった。 副葬品は，須恵器・鉄製武器・馬具とともに，大刀に伴う金銅製双龍環頭柄頭（そうりゅうかんとうつかがしら）は珍しい意匠で注目される。副葬品の内容から，古墳の築造は6世紀末から7世紀初頭ころと考えられる。 備前・備中地域においては，古墳時代前・中期に巨大な前方後円墳が築造されたのに対し，備後地域では，この古墳が突如として出現した。玄室内の石棺は，地元で採れる浪形石（なみがたいし）ではなく，畿内地域の前方後円墳などに採用された竜山石を用い，石室構造や出土遺物も畿内地域と関係があったことを示す。 このように，二子塚古墳は，7世紀前後のヤマト政権と吉備との政治状況を知ることができる点で，極めて重要な古墳である。		
国	名勝	鞆公園	ともこうえん		福山市鞆町後地，沼隈町能登原	大14.10.8 昭3.11.30（追加指定） 昭26.6.9（追加指定）			沼隈半島の南東，水呑（みのみ）から阿伏兎（あぶと）にいたる鞆断層崖の東側には，仙酔島（せんすいじま）を中心としてつつじ島・皇后島・弁天島など，大小の島々が散在する。この地は，瀬戸内海の中でもとりわけ美しく，江戸時代，鞆港に寄泊した朝鮮通信使・李邦彦は，「日東第一形勝」と賞賛している。 沼隈半島の南端は，険しい海食崖となり，阿伏兎岬の奇勝を生んでいる。この岬の前面，田島との間にある幅500mの阿伏兎瀬戸は，尾道港に通じる交通の要衝であるが，潮流が激しく，岬の突端に位置する磐台寺（ばんだいじ）観音堂（重要文化財）が海上に生活する人々の信仰を集めている。ここからの備後灘（びんごなだ）の展望は壮大で，西方芸予の多島海風景もすばらしい。		
県	重要文化財（建造物）	弁天島塔婆（九層石塔婆）	べんてんじまとうば（きゅうそういしとうば）	1基	福山市鞆町弁天島	昭29.9.29	石造九重塔，花崗岩製	高さ3.71m	鞆の対岸，弁天島に建つ九層石塔で，鎌倉時代（1192～1332年）の文永8年（1271）銘がある。 もとは十一層で，第五層と第六層が欠失したと思われ，第四層の上部が不自然になっている。各笠ごとに低い軸部を作り出しており，軒は厚く，力強い反りは両端で適当に反転している。初重軸部に薬研彫で彫られた金剛界四仏の種子と記年銘がある。鎌倉時代の手法を十分発揮したすぐれた作品で，県内最古の石塔婆でもある。相輪は惜しくも上半分を欠失している。		
県	重要文化財（建造物）	明王院三門	みょうおういんさんもん	1棟	福山市草戸町	昭30.3.30	桁行4.58m，梁間3.71m，四脚門，切妻造，本瓦葺		石段上に建つ四脚門である。慶長19年（1614）再建だが，現在の山門の建築材は新旧二様に分かれ，再建以前の門の部材が使われている。慶長19年のものと思われるのは建物の上半部である斗[84a8]（ときょう），軒，屋根などであり，軸部材である腹長押（はらながし），台輪，方立（ほうたて）などは，材質や技法などから室町時代（1333～1572年）のものと思われる。		
県	重要文化財（建造物）	沼名前神社鳥居 寛永二年黄梅吉良日の刻銘がある	ぬなくまじんじゃとりい	1基	福山市鞆町後地	昭32.2.5	石造	高さ5.47m	沼名前神社は鞆祇園社とも言い，式内社である。備後風土記には疫隅（えのくま）の国の社と記されている。 この鳥居は寛永2年（1625）福山藩主・水野勝重が長子勝貞の誕生により，その息災延命のため寄進したものである。笠木の上に鳥ぶすま形がのせられている点が特異な形式である。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（建造物）	宝篋印塔	ほうきょういんとう	1基	福山市新市町厚山	昭33.1.18	石造，花崗岩製	高さ1.3m	宝篋印塔の名称は，古く「宝篋印陀羅尼経」を納めたことによるが，その後供養のためや墓石として用いられるようになった。 この石塔の基礎には刻銘があり，南北朝時代の康暦2年（1380）に宗禅という僧侶の供養のため建てられたのが分かる。		
県	重要文化財（建造物）	明王院書院	みょうおういんしょいん	1棟	福山市草戸町	昭37.3.29	桁行八間，梁間六間半，入母屋造，本瓦葺		庫裏（くり，県重要文化財）とともに元和7年（1621）の建築と伝えられる。小屋組は古式の手法で仏壇の間，西の間，二階下の間からなり，一間ごとに柱を建てた書院形式初期の技法を伝える建物である。襖（ふすま）・杉戸に描かれた花鳥の絵は狩野派のすぐれたものである。向唐破風（むかいからはふう）屋根の玄関が附属する。		
県	重要文化財（建造物）	明王院庫裏	みょうおういんくり	1棟	福山市草戸町	昭37.3.29	桁行十二間，梁間十二・二間，入母屋造，本瓦葺		江戸時代の元和7年（1621）に建立された。書院と同年代の同じ初期書院形式を踏襲した建物で，小屋組は古式で規模は雄大である。数次の修理にもかかわらず，江戸初期の遺風をよく伝えている。		
県	重要文化財（建造物）	磐台寺客殿	ばんだいじきゃくでん	1棟	福山市沼隈町能登原	昭37.3.29	桁行五間半，梁間五間半，入母屋造，桟瓦葺，方丈建築		江戸時代の元文3年(1738)建立。中央に仏壇の間を設け，左右に書院と奥の間を配した禅宗の方丈建築で，欄間の意匠もすぐれている。建立後著しく改造を受けたが，江戸時代中期（16世紀後半～17世紀前半）の方丈建物の好例となっている。 磐台寺は沼隈半島の南端，阿伏兎（あぶと）岬にある。暦応年間（1338～1342）に覚叟建智（かくそうけんち）が開いたと伝え，一時衰退し建物は荒廃したが，元亀元年（1570）霊夢によって得た観音を安置する観音堂とともに，毛利輝元によって再建されたと伝えられる。阿伏兎観音として親しまれている。		
県	重要文化財（建造物）	神辺本陣	かんなべほんじん	7棟	福山市神辺町川北	昭44.4.28	本陣の本屋（瓦葺平屋建），御成の門，上段の間，三の間，札の間，玄関，敷台		江戸時代，尾道屋菅波家が営んでいた西本陣の跡。尾道屋菅波家は酒造販売業も営んでいた。 延享五年（1748）に建てられた本屋（平屋建瓦葺）は，御成の間，上段の間，三の間，札の間，玄関，敷台に至るまで，参勤交代の諸侯が宿泊した当時の面影をそのままにとどめている。札の間には諸侯の投宿時門前にかかげた木札が数多く伝わる。 店住居は天保2年（1831）建築，背後には馬屋も残り，安政2年（1855）の建築という正門と木造瓦葺の塀もあわせて，江戸時代の本陣施設がよく保存されている。 江戸時代の神辺は西国街道（近世山陽道）の宿駅として栄えた。		
県	重要文化財（建造物）	光照寺山門	こうしょうじさんもん	1棟	福山市沼隈町中山南	昭63.12.26	四脚門，切妻造，本瓦葺，桁行4.3m,梁行4.1m		江戸時代初期の慶長18年(1613)建立といわれる規模の大きな四脚門である。組物は壁付の肘木（ひじき）を横に広げた唐様系の構成で,全体には建設当初の部材をよく残している。 光照寺は沼隈半島の中央,山南の谷あいにあり，親鸞上人の法弟明光上人が中国地方への布教の拠点として建保4年（1216）に創建した寺院で,中国地方最古の浄土真宗寺院である。伽藍は戦国時代末期に火災にあったが,慶長18年に福島正則の援助によって再建した。		
県	重要文化財（建造物）	光照寺鐘撞堂	こうしょうじかねつきどう	1棟	福山市沼隈町中山南	昭63.12.26	入母屋造，四柱式，本瓦葺，間3.6m×3.8m		江戸時代初期の慶長18年(1613)建立と伝えられる，四柱式の鐘楼である。県内最古であり，また有数の規模を持つ。唐様を主体にした構造である。天井の板の一部に後補材がある以外は当初材であり,建立当初の形をよく残している。 光照寺は明光上人が中国地方への布教の拠点として建保4年（1216）に創建した寺院であり,中国地方で最も古い浄土真宗の寺院である。		
県	重要文化財（建造物）	観音寺本堂 附　棟札　1枚	かんのんじほんどう	1棟	福山市北吉津町一丁目	平4.10.29	桁行五間，梁間五間，一間向拝付，入母屋造，本瓦葺		慶安4年（1651）建立。福山城の鬼門守護のため建立されたと推定されている。 折衷様の建物で，装飾に桃山時代から江戸時代初期（16世紀末～17世紀前半）の技法が見られる。県内唯一の近世密教寺院本堂の遺構として，また折衷様の変遷をたどるうえでも，貴重な事例である。		
県	重要文化財（建造物）	観音寺表門	かんのんじおもてもん	1棟	福山市北吉津町一丁目	平4.10.29	桁行一間，梁間一間，四脚門，切妻造，本瓦葺		慶安4年（1651)頃，本堂と同時期に建立されたと推定される。四脚門と呼ばれる4本の柱で構成された門で，江戸時代初期（17世紀前半）の様式を伝えている。 禅宗様を取り入れた折衷様で構成されているが，和様の門の特徴である冠木を使用せず，中央柱を棟まで伸ばし，側との間に海老虹梁を渡し，そのために出来た棟と扉間の空隙を花格子欄間で埋めるなど，独特の工夫が見られる。		

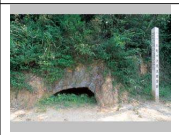
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（建造物）	吉備津神社神楽殿	きびつじんじゃかぐらでん	1棟	福山市新市町宮内	平9.5.19	桁行二間，梁間一間，屋根入母屋造，妻入銅板葺		江戸時代，寛文13年（1673）建立である。 いわゆる舞殿形式である。舞殿は高床の舞楽舞台に入母屋造妻入の屋根を架けた吹抜けの形式であるが，神社では神事用として最初に成立した固有の祭祀専用社殿である。京都を中心とした大社に造営され，近畿一円に普及するが，広島県内ではその例が少ない。 当社の神楽殿（舞殿）は簡素であるが建築的にも優れていて気品を備え，建築年代も明らかであり，保存状態もよく地方の舞殿としては貴重である。 吉備津神社は備後一宮であり，平安時代初期の大同元年（806）に備中吉備津神社を現在地に勧請したとされ，永万元年（1165）六月日付の記録にその名がみえる。		
県	重要文化財（建造物）	常国寺唐門	じょうこくじからもん	1棟	福山市熊野町	令和4年2月24日	正面1間　側面1間　向唐門　本瓦葺　木造		常国寺の唐門は，室町幕府最後の将軍である足利義昭の由緒を，享保期の施主と大工が当時の知識と技術で建物の形式及び意匠で示したという特色をもつ建造物である。扉上段の桟の間に桐文様を浮き彫りにした板が嵌め込まれ，中備の蟇股には足利氏の家紋である二つ引両が彫られている。軒丸瓦の瓦頭模様も，旧のものは二つ引両であり，足利義昭の御在所であった由緒を表現している。 虹梁や木鼻に彫られた絵様や蟇股の形などは、共に時代相応の特徴をみせる。控柱の虹梁形の頭貫とそれに直交する木鼻は雲形に作られており，大瓶束の左右に付く笈形彫刻も力強く，材質・技法・意匠ともに優れている。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色水野忠重画像	けんぽんちょくしょくみずのただしげがぞう	1幅	福山市寺町	昭28.10.20	絹本著色，軸装	縦120cm，横52.5cm	水野忠重は三河の国人領主，初代福山藩主・水野勝成の父である。この画像は寛永17年（1640）に水野勝成が画工に命じて描かせたもの。画の上には，勝成の求めに応じた大徳寺住職・宗玩の賛がある。 賢忠寺は，水野勝成が創建した水野氏歴代の菩提寺で，水野氏関係の遺品をいくつか伝えている。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色水野勝成画像	けんぽんちょくしょくみずのかつなりがぞう	1幅	福山市寺町	昭28.10.20	絹本著色，軸装	縦98cm，横46cm	正保2年(1645)，水野勝成晩年の姿を描いた画である。大徳寺住職源安の賛がある。 水野勝成は徳川譜代の大名で，元和8年（1627）福山城を築いた。武将として活躍する一方，俳諧（はいかい）などの文学をたしなんだ。福山においても新田開発や城下の建設に意をそそいだ。彼の墓所は，同じ賢忠寺境内にある。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色弘法大師画像	けんぽんちゃくしょくこうぼうだいしがぞう	1幅	福山市市町	昭29.9.29	絹本著色，軸装	縦113cm，横77cm	この大師像は目許が常に見守っているようなので「目引き大師」とも言われる。構図は他の弘法大師像と変わりないが，画幅の右上の隅に大師の誓願仏である弥勒菩薩が描かれているのは珍しい。室町時代（1333～1572年）の作。 画の裏面には，元禄12年（1699）に盗難にあったが江戸谷中（やなか）長久寺で発見され，寺に帰ってきた旨の墨書がある。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色親鸞上人絵伝	けんぽんちゃくしょくしんらんしょうにんえでん	1幅	福山市沼隈町中山南（京都市下京区　龍谷ミュージアム寄託）	昭30.3.30	絹本著色	縦175cm，横120cm	この絵伝は，南北朝時代の建武3年（1336）本願寺存覚上人が滞留した際，法然上人絵伝三幅などとともに著わしたと伝えられる。画工は隆円，建武5年(1338)成立という。康永2年(1343)の絵伝が増補される以前のもので，掛軸絵伝の初期のものである。 光照寺は建保4年（1216）明光上人の開創といい，中国地方浄土真宗流布の拠点であった。		関連施設：龍谷ミュージアム（075-351-2500）
県	重要文化財（絵画）	絹本著色浄土真宗明光派先徳像	けんぽんちゃくしょくじょうどしんしゅうみょうこうはせんとくぞう	1幅	福山市駅家町倉光	昭38.11.4	絹本著色，軸装	縦122cm，横54cm	明光派浄土真宗教団の，平安時代から鎌倉時代（9～14世紀前半）までの主な僧侶13人の肖像画。南北朝時代（1333～1392）ないし室町時代初期（14世紀前半）の作と推定される。 明光派浄土真宗は，鎌倉時代末期以来，沼隈町山南（さんな）の光照寺を中心に備後南部一帯で信仰をあつめた。 向って左上の源空以下，親鸞，真仏，源海，了海，誓海，明光，信光，良誓，明尊，性尊，勝尊の順で左右交互に描かれている。最後の一人はよくわからない。信光以下勝尊までは明光に従って来た備後教団の指導者で，最後の人物は願主であろうか。 像を墨線で描き，彩色を加えた筆致のすぐれたもので，初期真宗教団の研究資料として貴重である。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色法然上人絵伝	けんぽんちゃくしょくほうねんしょうにんえでん	3幅	福山市沼隈町中山南（京都市下京区　龍谷ミュージアム寄託）	昭42.5.8	絹本著色，軸装	縦150cm，横130cm	浄土宗の開祖法然上人及び新来の仏教を積極的に受容した聖徳太子の二人は浄土真宗と浅からぬ縁をもっている。 この絵は建武3年（1336）中国地方における浄土真宗布教の拠点である光照寺に，本願寺の存覚上人が滞留した際，同寺所蔵の親鸞上人絵伝とともに著したと伝えられるもので，裏書によると願主は明尊上人，画工は狩野隆円と記され，建武5年（1338）に描きあげられたという。掛軸絵伝の初期のものとしても貴重な資料である。		関連施設：龍谷ミュージアム（075-351-2500）
県	重要文化財（絵画）	絹本著色聖徳太子絵伝	けんぽんちゃくしょくしょうとくたいしえでん	4幅	福山市沼隈町中山南（京都市下京区　龍谷ミュージアム寄託）	昭42.5.8	絹本著色，軸装	縦150cm，横120cm	建武5年（1338），明尊上人を願主として隆円が描いた作品で，親鸞上人絵伝や法然上人絵伝と一連の作品である。聖徳太子は浄土真宗においても重要視されており，聖徳太子を礼拝するために多くの作品が作られた。 4軸にわたって聖徳太子の生涯を紹介したものである。1軸4段で16場面が描かれている。		関連施設：龍谷ミュージアム（075-351-2500）

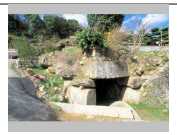
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（絵画）	絹本著色不動明王像	けんぽんちゃくしょくふどうみょうおうぞう	1幅	福山市駅家町新山	昭46.4.30	絹本著色，軸装，38cm幅と16.5cm幅の画絹を継ぐ	縦120cm，横54.5cm	室町時代中期（15世紀前半頃）の製作。中央に火炎光を背にする不動明王立像を描き，制多迦（せいたか），矜羯羅（こんがら）の二童子を左右の脇侍に配した三尊形式の構図をとる。色彩及び描線は当初のものをよく残しており，保存も良好である。 不動明王は，如来の使者，真言行者を守護するという性格を持っており，空海・円珍以後平安・鎌倉・室町を通じて流行し，今日に多くの作品を残している。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色不動明王像	けんぽんちゃくしょくふどうみょうおうぞう	1幅	福山市北吉津町二丁目	昭47.4.24	絹本著色，軸装	縦98cm，横40.5cm	室町時代中期（15世紀前半頃）の作。火炎光背を背にした中尊不動明王を中心に，脇侍に制多迦（せいたか），矜羯羅（こんがら）の二童子を配する。当初の彩色をよく残している。 不動明王像は平安時代（794～1191）以来流行し，彫刻に絵画に県内にもその作例は多い。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色釈迦涅槃図	けんぽんちゃくしょくしゃかねはんず	1幅	福山市内海町田島	昭57.2.23	絹本著色，軸装	縦181.0cm，横156.7cm	涅槃像は肉身を金色に塗り法衣には袈裟（けさ）の田相を表わす，涅槃台の格狭間（こうざま）には暈繝（どんらん）彩色を施す円形を描き，涅槃像をめぐる比丘，鬼人，菩薩，婦人，動物等の描写は普通の涅槃図と異ならないが，天上にある麻耶夫人がむかって左上に描かれているのは珍しい。沙羅樹の筆致，画面に漂う筆法の硬さは時代性かと思われる。 涅槃像の法衣の田相を〈まどり彩筆していること，涅槃台の格狭間の暈繝彩色にして円形を作っていることから室町時代末期（16世紀）の作と考えられる。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色明光上人像	けんぽんちゃくしょくみょうこうしょうにんぞう	1幅	福山市沼隈町常石	昭57.10.14	絹本著色，軸装	縦112cm，横90cm	沼隈光照寺や宝田院を開いた明光上人の肖像画。南北朝時代（1333～1392）の作。冊子を置いた机を前に，数珠をつまんだ姿を描く。明光上人の銘を有し，金具の文様，絵画の描法などは工芸的にすぐれ，また宝田院の開山をはじめ本県における浄土真宗明光派の伝道の歴史を知る上でも貴重な資料である。 明光（1286～1353）は，親鸞上人直門の六老僧の一人として伝えられている。関東鎌倉方面で布教活動をしていたが，西下して元応2年（1320）頃備後沼隈郡の中山南に光照寺，更に宝田院を開き，布教にあたった。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色光明本尊	けんぽんちゃくしょくこうみょうほんぞん	1幅	福山市沼隈町常石	昭57.10.14	絹本，軸装	縦168cm，横102cm	南北朝時代（14世紀）の作。 本画像の名称の由来は，画像の構成が中央に金泥にて「南無不可思議光如来」の九字名号の本尊形をなし，それより金線をもって光明を発するところによっているものと思われる。中央名号と，向って右側下方の「歸命盡十万无旱光如来」の十字名号との間に頭光背（ずこうはい）を付す釈迦如来立像を描き，向って左側下方の「南無阿弥陀仏」の六字名号との間に，これも光背を付す阿弥陀如来立像を描く。左右にはインドや日本の先師像が配されている。 本願寺覚如の子・存覚が自筆の画像を尾道・福善寺とともに宝田院に与えたと伝えられる。		
県	重要文化財（絵画）	紙本著色一流相承絵系図	しほんちゃくしょくいちりゅうそうしょうえけいず	1幅	福山市沼隈町常石	昭57.10.14	紙本著色，巻子装	総長348cm，縦44cm	この系図には嘉歴元年（1326）の銘があるが，同年の紀年銘をもつ系図は他にも存在しており，どちらが先に描かれたものかはっきりしない。しかし，いずれにしても南北朝時代初期（14世紀前半）の製作とみてよい。また，工芸的にも当時の製紙の紙質を知る標本ともなり，系図の前書は国語学の上からも当時の仮名書の筆致を知る上の参考となるものである。		
県	重要文化財（彫刻）	木造多聞天立像	もくぞうたもんてんりゅうぞう	1躯	福山市津之郷町津之郷	昭29.9.29	一木造	像高114cm	平安時代初期（9世紀）の優作である。廃和光寺にあった四天王像のうちの1体と言われる。 廃和光寺は出土した瓦から推測して，奈良時代（710～793）の創建と思われる寺院である。周辺は和名類聚抄に載る津之郷の郷名を伝えることなどから，この地に有力な豪族が居住し，和光寺はその氏寺であったことも考えられる。 ※和名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）…平安時代の百科辞典		
県	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょうらいざぞう	1躯	福山市沼隈町上山南	昭44.4.28	寄木造，半眼木眼	像高67cm，膝張56cm	寺伝の古記によると，本尊は当地の廃寺西大寺（西提寺とも書く）の本尊であったと伝えており，衣を通肩（つうけん）にかけ，木彫の眼を半眼に結跏趺坐（けっかふざ）し，弥陀の定印（じょういん）を結び後補の複合蓮座に坐る。衣文の彫りは後補の塗りでやや鈍るところもあるが，全体的によく鋭さをとどめている。衣の裾の端に，当初の金泥で描いた文様の痕を残している。光背（こうはい）は左上方部を欠失しているが，本体と同時代の作かと思われる。室町時代初期（14世紀）の作である。		
県	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	福山市西町二丁目	昭47.4.24	寄木造	像高87cm，膝張47cm	平安時代後期（12世紀）の作と見られる優作で，寄木造である。 顔面及び胸部を金色に塗っているが，これは後補と思われる。左肩と右腰部の寄木は一部欠損しているが，腹部の辺の衣文には翻波（ほんぱ）式の手法が見られる。		

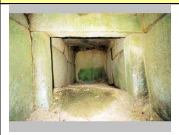
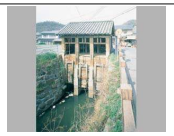
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（彫刻）	木造地蔵菩薩立像	もくぞうじぞうぼさつりゅうぞう	1躯	福山市西町一丁目	昭47.4.24	寄木造	像高60.5cm	室町時代中期（15世紀）の作と考えられる像。寄木造。玉眼入り。顔及び胸部に金泥を塗り法衣に金箔をおいた上に，繊細優美な宝相華（ほっそうげ）文様を描いている。衣は通肩（つうけん）にかける。右手の錫杖（しゃくじょう）は当初のもの，左手の宝珠は後補と思われる。岩座の上の臼形蓮座に立つ写実的な作風の秀作である。		
県	重要文化財（彫刻）	木造釈迦如来坐像ならびに脇侍二菩薩の獅子座および白象座	もくぞうしゃかにょらいざぞうならびにわきじにぼさつのししざおよびはくぞうざ	3躯	福山市北吉津町二丁目	昭47.4.24	寄木造，獅子座，白象座	本尊／像高86cm，膝張76cm 獅子座／高さ93.5cm，長さ101cm 白象座／高さ66cm，長さ132cm	南北朝時代の貞和3年(1347)頃作の釈迦三尊像（脇侍は後補）。現在の福山城跡の丘陵（常興寺山）にあったとされる禅宗寺院・常興寺に安置されたが，江戸時代初め（17世紀）の福山城築城の時，現在地に移されたと言われる。寄木造。 釈迦三尊象が残る例は県内でも少なく，両脇侍の動物座がそろっているものは更に少ない。本尊は，衣の下に漆を塗り布を貼った痕が見られる。手の指間に弁網をあらわし，説法印を結び結跏趺坐（けっかふざ）して，装飾蓮華座に坐っている。造像時，像内に金銅製五輪塔や経典類が納入されていた。 胎蔵寺は真言宗寺院で，もと神辺（かんなべ，深安郡神辺町）にあり福島丹波の祈願所であった。福島正則の改易後に福山城下へ移り，17世紀中頃，現在地に移ったといわれる。		
県	重要文化財（彫刻）	木造薬師如来立像	もくぞうやくしにょらいりゅうぞう	1躯	福山市鞆町後地	昭48.12.18	寄木造，玉眼，白毫，螺髪は左螺旋，肉髻相	像高79.0cm	室町時代中期（15世紀）の作である。寄木造。医王寺の秘仏として厨子に納められていたため大変保存がよく，台座等すべて当初のものである。着衣の彫法は写実的で，特に胸部の衣文及び左右両手のひじから垂れる法衣のたもとはよく室町時代中期の特色を表している。法衣は通肩（つうけん）にかけ，右手を上げて掌を前に，左手は下げて掌の上に薬壷を握する立像である。頭部螺髪（らほつ）は螺線（らせん）を施した緻密な作で肉髻を施しているが，耳朶（じだ）には孔を貫く。口唇にさされた紅の顔料は当初のものと思われる。 ※肉髻（にっけい）…仏の姿を表す三十二面相の一つで頭頂の髷（まげ）の形をした部分		
県	重要文化財（彫刻）	木造地蔵菩薩半跏像	もくぞうじぞうぼさつはんかぞう	1躯	福山市金江町金見	昭48.12.18	寄木造，円頂玉眼，水晶製の白毫	像高55.0cm，膝張41.5cm	室町時代中期（15世紀）の作。寄木造。実蔵坊に伝わるものだが，像底部の六角柱に承応3年（1654）銘の墨書があり，もと京都・醍醐寺にあったことが知られる。 この像は蓮華台座に半跏（はんか）して坐り，法衣は通肩（つうけん）にまとい袈裟をかけ衣文は写実的である。胸の下部に襷帯（こんたい）をあらわしているのは珍しい。円頂であり白毫をはめ，眼は玉眼に造る。頭部に三道があり，耳朶（じだ）には孔を貫くなど時代的技法を残している。 ※白毫（びゃくごう）…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光明を放つとされる		
県	重要文化財（彫刻）	木造毘沙門天立像	もくぞうびしゃもんてんりゅうぞう	1躯	福山市神村町字平	昭48.12.18	一木造，獅子岩座	像高66.5cm	平安時代（794～1191）の作。一木造。冑（かぶと）を着，後補の鬼座に立つ天部の姿に彫成し，腹部には古式の獅噛（しかみ）をあらわす。腰から半円形に垂れる腰緒は磨滅度はひどいが，翻波（ほんぱ）式の彫法を用いていることを明らかに示している。更に背中の胄尾垂（かぶとおだれ）も短か(時代の特徴をよく表したものである。なお，材質の木目を巧みに利用した秀作ではあるが，円光背・打抜銅製宝冠（うちぬきどうせいほうかん）・持物及び腰部左右に垂れる鰭（ひれ）は後補である。		
県	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来立像	もくぞうあみだにょらいりゅうぞう	1躯	福山市内海町	昭54.3.26	寄木造，玉眼	像高83.5cm	木彫寄木造である。頭部胴部を一木をもってよく応用して，木目を左右均等に衣文にまで応用するなど，巧みな彫法を施している。 台座，光背（こうはい）は後補と見られる。室町時代中期（15世紀）の作である。 西音寺は真言宗寺院である。		
県	重要文化財（彫刻）	木造仁王立像	もくぞうにおうりゅうぞう	2躯	福山市駅家町新山	昭57.2.23		阿形力士／像高190cm 吽形力士／像高182.5cm	寛元3年（1245），鎌倉時代の作。寄木造。阿形（あぎょう）力士，吽形（うんぎょう）力士の二躯（一対）からなる。作者は僧昌快（しょうかい）と記される。県内の指定仁王像の中では最古のものである。 阿形力士は，頭部・胴体から左脚にかけて一木彫成し，両腕はともに肩に鎹（かすがい）止めしてある。口を開いて歯を表わし，眼は木彫に造る。右側裳垂れ，右足すねは寄木に造り鎹（かすがい）にて止め，背刳（せぐり）覆板は鎹で胴体に固定している。右肘先，左手先を欠失，両足先は後補である。 吽形力士は頭部・胴部・脚部を一木彫成し，腕部は肩に於いて寄木，背部及び腰部にかけて背刳して板をはめこみ，鎹にて止めている。その一枚の三角形の板の内面に造像銘が記されている。口を閉じ筋骨隆々たる忿怒（ふんぬ）の力士像で眼は木彫に造る。彫法技法は阿形力士とほとんど同彫である。両足先，右手先などを欠失する。		
県	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1躯	福山市鞆町後地字古城跡	平3.4.22	寄木造，玉眼	像高145.7cm	室町時代（1333～1572）の作。前後左右に四材を矧（は）ぎ合わせた寄木造で，目には玉眼を嵌入（かんにゅう）し，肉身や着衣の表現において写実性に優れた点を認めることができるものである。目は微笑をあらわし，口は開いて上歯四本をのぞかせており，「歯吹き観音」と称される。		
県	重要文化財（彫刻）	木造弥勒菩薩坐像及び木造不動明王坐像・木造愛染明王坐像	もくぞうみろくぼさつざぞうおよびもくぞうふどうみょうおうざぞう・もくぞうあいぜんみょうおうざぞう	3躯	福山市草戸町	令和2年（2020）3月23日	寄木造，截金，盛り上げ彩色，玉眼嵌入	像高：弥勒菩薩 52.7cm，不動明王 28.8cm，愛染明王 34.4cm	本文化財は，南北朝時代（貞和4年〔1348〕）創建の明王院五重塔（国宝。以下「五重塔」という。）初層に安置される。 中央の弥勒菩薩像は，端正な慈悲相を表し，ゆったりとした構えに格調の高さを示す。着衣には截金（きりかね）や盛り上げ彩色による文様が施され，装飾的にまとめられる。 不動明王像・愛染明王像は，忿怒（ふんぬ）の形相をよく表し，肉身や着衣には丹念に施された華麗な彩色・文様が残る。 いずれも小像ながら，彫技や装飾が繊細で巧みであり，仏師の高い技術と優れた造形感覚が認められる。特に，各像の着衣に見られる彩色・文様は，五重塔内荘厳画とほぼ同様もの として違和感がなく，五重塔の創建に近い時期の造像になると考えられる。 この三躯の組合せは，県内唯一の制作時期が中世に遡る作例である。 以上のことから，本文化財は，制作優秀であるとともに，五重塔とも共通する制作当初の装飾が良好に残る，稀少な像種の組合せであることから，貴重な作品であると評価できる。		

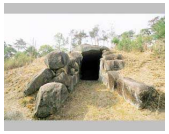
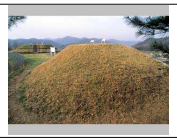
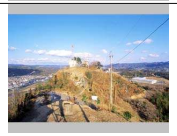
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（工芸品）	達磨大師位牌	だるまだいしいはい	1基	福山市鞆町後地	昭30.1.31	木製，朱漆塗	高さ68cm	臨済宗法燈派の宗祖達磨大師の位牌である。文永10年（1273）金宝寺仏殿（現在の安国寺釈迦堂，重文）が造営されたのを記念し，大工藤原季弘が施入したものである。鎌倉時代（1192～1332）の位牌形式を知るうえで貴重な資料である。		
県	重要文化財（工芸品）	金銅五鈷鈴	こんどうごこれい	1口	福山市駅家町新山	昭30.3.30	金銅製	高さ18cm，口径6cm	弘法大師将来と伝える唐代（7～10世紀）の作品で，鈴の胴には五大明王が刻まれており，絵の下部はややすぼんだ形状をしている。五鈷（ごこ）の痕跡は残しているが，江戸時代中期（17世紀後半～18世紀前半）に堂宇が焼亡し，本品は一時土中に埋れていたためか，柄の五鈷の部分をほとんど欠損している。 福盛寺は真言宗の古刹である。		
県	重要文化財（工芸品）	銅製鐶杖頭	どうせいしゃくじょうとう	1柄	福山市新市町宮内	昭33.1.18	銅製	長さ31.5cm，環横外径15cm，柄管12cm	柄管（えかん）の上部に円形の環をつけ，環の両肩ならびにその対角の環上に弧月形の突起がついている。環の上頭には五輪塔を鋳出し，その五輪塔と柄管を結ぶ環内直線上には，両脇に華瓶をもつ宝篋印塔（ほうきょういんとう）を鋳出している。普通の鐶杖（しゃくじょう）に見ると同様に，仏教の六道を意味する6個の小環を左右に3個ずつ完存している。この鐶杖は環に古い形式をとどめており，大形であるのも珍しい。柄管に応仁3年（1469）の紀年銘がある。 「備後国一宮吉備津彦大明神願主□□応仁三年己丑」		
県	重要文化財（工芸品）	姫谷焼色絵皿	ひめたにやきいろえざら	6口	福山市加茂町（5口） 呉市広吉松（1口）	昭46.4.30	紅葉文の皿　5客1組（5口） 飛雲桜閣山水文の皿　1口	紅葉文の皿／径約16cm，高さ2.4cm 飛雲桜閣山水文の皿／径18cm，高さ2.6cm	姫谷焼は，肥前系の磁器製造技術を持つ陶工市右衛門（？～1670）が焼いた磁器である。17世紀後半のごく短期間焼かれたものであるが，色絵の磁器としては，日本でも早い段階の作品である。紅葉文皿は五客一組，紅葉の一枝を画き，染付青華で下絵を画き，赤，緑，黄色で絵付されている。飛雲楼閣山水文皿は，平縁白磁の中皿に染付の飛雁と流水，樹木は緑と黄色の絵付がなされている。 なお，姫谷焼窯跡（県史跡）から同様の染付部分の破片が出土している。		
県	重要文化財（工芸品）	密教法具	みっきょうほうぐ	1具	福山市金江町金見	昭48.12.18	金銅製 五鈷杵，五鈷鈴，金剛盤，各1口	五鈷杵／長さ14.6cm 五鈷鈴／高さ19.0cm，口径7.6cm，鈴の厚さ0.4cm 金剛盤／高さ3.8cm，縦17.8cm，横24.5cm	鎌倉時代～室町時代（12世紀末～16世紀）製作の，密教儀式に用いる法具。いずれも金銅製。 五鈷杵（ごこしょ）は鈷の肩はりは強く，握柄の二重帯もよくしまり，猪目もよく現れている。蓮弁の脈すじの細さは精巧で，制作年代に相応する作品である。 五鈷鈴（ごこれい）は鈴の肩の蓮弁は握柄の蓮弁と同じ手法で，鈴胴には子持ち帯をもち，この時代の特色をよく示している。 金剛盤（こんごうばん）は三つの脚がついており，形は四弧形である。外縁部の断面は三角形になり，前面の弧の両端の猪目とともにこの時代の特色をよく表している。 杵は煩悩を砕き仏の智慧（ちえ）の光を表す。鈴は密教の儀式の時，諸尊を覚めさせ喜ばせるために鳴らす。		
県	重要文化財（工芸品）	革包茶糸威二枚胴具足	かわづつみちゃいとおどしにまいどうぐそく	1領	福山市寺町	昭52.3.4		胴高さ43.5cm，兜高さ35.0cm，同前後径22.5cm，同左右径19.0cm，袖幅20.5cm，同長さ28.0cm，総重量10.2kg	福山水野氏の菩提寺・賢忠寺に伝わる当世具足で，福山藩初代藩主・水野勝成の所用と伝えられる。 兜は，唐冠形の鉢の左右に黒い熊毛で包んだ長い纓（えい）をつけ，前立（まえだて）には木製漆塗の魁（しかみ）が取り付けてある。胴は鉄を革包にし茶漆塗りにした桶側胴で，その下部二段は茶色糸で毛引威（けびきおどし）にするなど，旧来の甲冑にくらべ特異な意匠をもち，防禦にすぐれ軽快堅牢で，傷みは少なくほぼ完形である。 当世具足は室町時代末期から安土桃山時代（16世紀後半～17世紀初頭）にかけて発達したもので，この具足はその完成期に武将が着用した例として，武具の歴史を知るうえで貴重な資料である。		
県	重要文化財（工芸品）	銅鐘	どうしょう	1口	福山市沼隈町下山南	昭54.3.26		総高111cm，直径67.6cm	周防に本拠をおく戦国大名大内義隆が天文13年（1544）安芸厳島神社に寄進した。銘文があり，龍頭中央の宝珠の火炎を四方に付けた中世の和鐘である。 追銘から，後に賀茂郡西条四日市（東広島市西条町）真光寺に移されたことが分かり，明治時代になって西光寺所有となった。		
県	重要文化財（工芸品）	金銅製独鈷杵	こんどうせいどっこしょ	1口	福山市内海町	昭54.3.26		長さ17.5cm	密教法具の一種である。杵（きね）の形をして，両端に鋭い刃をつけたものを金剛杵（こんごうしょ）といい，もともと武器だったものが象徴化されて，悩みをやぶり，仏性を表わすための法具となった。その中でも両端が一本のものを独鈷杵という。 この独鈷杵は金銅製で，鈷の先四方に鎬を入れている。握部の猪目・連弁のしぼり強く，全体の仕上げはよくまとまり，鋭さを思わす。製作は室町時代初期（14世紀前半）を下るものではない。 ※鎬（しのぎ）…刀身の背から刃へ移る境の線。		
県	重要文化財（工芸品）	金銅製三鈷杵	こんどうせいさんこしょ	1口	福山市内海町	昭54.3.26		長さ17.5cm	密教法具の一種である。杵（きね）の形をして，両端に鋭い刃をつけたものを金剛杵（こんごうしょ）といい，もともと武器だったものが象徴化されて，悩みをやぶり，仏性を表わすための法具となった。その中でも矢が湾曲して分岐した鉾（ほこ）の数が三本のものを三鈷杵という。 この三鈷は室町時代初期（14世紀前半）の作と推定される。金銅製で，握部は偏平形となる。猪目の突起も著しく，連弁のしぼりも強く，両端の跨（こ）の張りも著しい。時代の特徴をよく表している。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（工芸品）	銅製鐃口	どうせいわにぐち	1口	福山市神辺町八尋	昭55.6.24	銅製	直径35.5cm	鐃口は寺社の軒下にかけ叩き鳴らして使用するものである。 この鐃口は胴の表裏二面を同じ型で鋳造し，合わせた形式である。表面は銘帯と中区，撞座（つきざ）区の三区にわかれ，銘帯には最初に刻まれた銘文を消して，後に追刻されている。鈎手（かぎて）である耳は角丸の四角形に近く，目は耳の下方にごく短かく筒状に凸出し，中央下部の目の間に裂け口を開き，鉦鼓（しょうこ）縁状の唇をめぐらしている。 最初の銘はかすかに残るものをみると「右旨趣者口天下泰平口口口」と左側にあり，右側の文字は追刻の「備後国安那郡八尋村神宮寺」の銘文で消されて判読できない。裏面の銘文は，神宮寺の銘文と同刻で右側に「應永一六年二月日」，左側に「大願主惣且中」と刻んでいる。 これらの銘文から，この鐃口が室町時代中期の応永16年（1409）に神宮寺（現在の深安郡神辺町八尋にある吉備津神社）に寄進されたことが分かる。		
県	重要文化財（工芸品）	太刀	たち	1口	福山市引野町北二丁目	平8.9.30	鎬造，庵棟，鍛え板目，小鋒	全長92.0cm，刃長74.3cm，反り2.3cm，目釘孔1個，重量670g	鎌倉時代末期（14世紀前半）の作。備後神辺の国分寺助国の作品である。国分寺助国は三原刀工と並んで鎌倉時代（1192～1332）の備後を代表する刀鍛冶であり，大和系の技術で製作する三原鍛冶に対して，備前・備中系統の刀剣類を製作していた。		
県	重要文化財（工芸品）	短刀　銘口州国分寺住人助国作　嘉暦二年正月日	たんとう　めい（一字不明）しゅうこくぶんじじゅうにんすけくにさく　かりゃくにねんしょうがつにち	1口	福山市草戸町	平成30年（2018）３月22日	平造，庵棟、鍛えは板目に杢交じり、目釘穴二個。	全長34.8cm，刃長24.8cm，わずかに内反り，目釘穴2個，重量142g	鎌倉時代末期の嘉暦２年（1327），現在の福山市神辺町下御領の備後国分寺を拠点として活動した刀工の助国（すけくに）によって製作された短刀。 助国は，備前伝（一文字派）の流れをくみ，大和伝（手掻系）の流れをくむ三原派（古三原）とともに，備後地域において最も古く鎌倉時代末期から南北朝期にかけて活躍したことが知られる。助国には代があったと考えられ，本短刀の作者と考えられる二代助国は，初期は備前伝の作風であるが，徐々に大和伝が強くなる作風を示す。 本短刀の内反りとなる姿は，鎌倉時代の短刀の特色をよく表す。板目に杢交じりの地肌（鍛え）や筋映りを見せる点などに備前伝（一文字系）の特色が認められるとともに，直刃調の小沸つき刃文などに大和伝（手掻系）の特色が認められる。備前伝と大和伝が混在する点は，二代助国の中期の作風を顕著に示しており，全体として優れた出来映えである。 助国一派の現存する作品は非常に少なく，特に短刀の遺例は稀有であるが，その中にあって本短刀は在銘で嘉暦２年の年紀を有しており，同刀工の研究上において重要な作品である。 また，県内の刀工が製作し，県内に所在する国又は県指定文化財の刀剣類に照らして，年紀を有するものでは最も古い年代に位置付けられることから，本県の刀剣史上においても貴重な資料である。		
県	重要文化財（典籍）	葛原勾当日記 附　印刷用具1具及び琴，三味線稽古墨筆記録10冊	くずはらこうとうにっき	3帖・11冊	福山市神辺町新湯野町（菅茶山記念館　保管）	昭29.9.29 昭50.4.8 （追加指定，名称変更）			葛原勾当は文化9年（1812）現在の深安郡神辺町八尋に生まれた。3歳の時ほうそうにかかり失明，9歳で京に上り松野検校（けんぎょう）の門に入り，生田（いくた）流の箏曲（そうきょく）と地歌（ぢうた）を学んだ。15歳で勾当の位階を許され，郷里の地名をとって葛原勾当と称した。帰郷して後は，備後，備中（岡山県西部）両国を中心に広く教授に当たり，関西の名手として聞こえた。 勾当日記は，26歳から71歳で病没するまで，みずから案出した木活字を使って記したものである。活字はひらがな，数字，句点からなり，線を刻み触感で判別できるよう，また行は定木で正すように考案されており，今日のタイプライターの原理に通じるものがある。その記載は簡潔素朴，音の世界を詠んだ歌が260首も収められており，勾当の感受性の鋭さがうかがわれる。		
県	重要文化財（典籍）	西備名区	せいびめいく	123冊	福山市駅家町向永谷	昭41.4.28			向永谷村（福山市）の庄屋・馬屋原重帯（1762～1836）が著した備後全域の地誌。草稿本90巻34冊（完備），清書本89巻89冊（初巻欠，第27巻後補）からなる。 草稿本は文化元年（1804）成立，その後も改定増補が続けられ，清書本には「文化五年夏四日馬屋原重帯誌」の跋文（ばつぶん）がある。郡別に各村の地誌的情報を詳細に記し，後の「福山志料」などののもとになった。他の伝写本と異なり著者の自筆であり，完全な姿で子孫に所蔵されていること，備後全域のほとんど唯一の詳細な地誌として史料的価値のあることなど，県地域に密着した著作として貴重である。		
県	重要文化財（典籍）	菅波信道一代記　附　箱2合	すがなみのぶみちいちだいき	75冊	福山市神辺町川北	平14.2.14	形状／半紙二ツ折冊子装 （箱）覆箱　桐材	縦27.3cm 横19.7cm （箱）蓋　縦33.3cm　横25.4cm 深さ40.4cm 身　縦31.5cm　横23.5cm 深さ40.7cm	本書は，備後国安那郡川北村（現深安郡神辺町大字川北）の尾道屋菅波家11代当主であった菅波信道（寛政4年～慶応4年（1792～1868））が口述筆記して作成した自叙伝である。 本書には，彩色の挿図が多用され，災害や事件に関する挿図はもとより，酒造や酒販売の実況を伝える挿図など，当時の日常生活・世相・風俗を余すところなく伝えている。		
県	重要文化財（考古資料）	廃和光寺塔址出土遺物 風鐸破片3，九輪破片3，中心礎石1	はいわこうじとうあとしゅつどいぶつ	7点	福山市津之郷町津之郷	昭29.9.29		九輪は復原推定直径32～42cm 風鐸は復元推定長約20cm	和光寺は奈良時代後期～平安時代初期（8世紀後半～9世紀前半）の古代寺院である。その後荒廃し，永禄5年（1562），時の津之郷領主田辺氏が寺域の一角に田辺寺として再興し現在に至るという。 塔の中心礎石は，縦115cm，横87cmのやや長方形の自然石に直径38cm，深さ22cmの穴があけられ，両側に幅24cm，深さ3cmの溝が彫られているが，元の場所から移動している。 九輪の破片は，青銅製で，長さ43cm，38cm，32cmのものが3個である。本来，塔の頂部に建てられていたものである。 風鐸（ふうたく）は，堂塔の軒先につるされていたものである。復元すると約20cmほどの大きさと推測され完全な姿が想像できる貴重な資料である。		関連施設：福山城博物館（084-922-2117）
県	重要文化財（考古資料）	平形銅剣	ひらがたどうけん	1口	福山市草戸町	昭32.9.30	銅剣	長さ45cm，幅9cm，茎巾5cm	昭和6～7年（1931～32）頃，福山市熊野町の熊ヶ峰山麓の熊野神社裏山から折損した一口とともに発見されたもので，折れた方は現在散逸している。銅剣は，突起部から刃先になるほどややふくらみをもっている。茎部は扁平な円筒状で，その両側には樋が通っている。沼隈郡沼隈町中山南の日枝神社の平形銅剣（県重要文化財）と同型の可能性がある。平形銅剣は，弥生時代後期（2世紀～3世紀），まつりに使用したと考えられている青銅製の剣で，伊予を中心とする瀬戸内海中部地域一帯に分布している。		
県	重要文化財（考古資料）	平形銅剣	ひらがたどうけん	1口	福山市沼隈町中山南	昭32.9.30		長さ45cm 茎幅5cm	この銅剣は，日枝神社の神宝として伝世し，同社宮司新良貴家に保管されてきた。同家の史料によると，神社の東方100m余のところにある石児の窟（巨大な立石）から出土したことが記載されている。この銅剣は，福山市熊野町の熊野神社裏山から出土した平形銅剣と同型の可能性がある。平形銅剣は，弥生時代後期（2世紀～3世紀頃），まつりに使用されたと考えられており，巨石の周りに埋納されたものと推定される。		

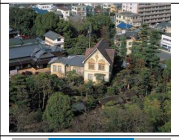
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（考古資料）	荒神古墳副葬品 金銅装太刀1口（柄頭，つば，はばき，さや，責め金，刀身） 刀身3口 耳輪4個 勾玉9個 切り子玉7個 須恵器蓋杯2組 須恵器杯1個	こうじんこふんふくそうひん	27点	福山市西町二丁目県立歴史博物館	昭36.11.1			荒神古墳は，高田郡甲田町下小原にある恩地古墳群に属していた。墳形は円墳で，内部主体は横穴式石室であったと思われるが，明治43年（1910）に発掘され，現在は全壊して規模は不明である。遺物の出土状況は明らかでないが，その一部が指定されたもので，いずれも古墳時代後期（6～7世紀）の特色をもつ資料である。これらのうち金銅装太刀は，圭頭（けいとう）の柄頭（つかがしら）であり県内から出土する例は稀である。		関連施設：広島県立歴史博物館 （084-931-2513）
県	重要文化財（考古資料）	伝潮崎山古墳出土三角縁五神四獣鏡及び短冊型鉄斧　1箇	でんしおざきやまこふんしゅつどさんかくぶちごしんししゅうきょうおよびたんざくがたてっぷ	1面	福山市新市町相方	昭56.11.6 昭57.2.23（追加指定，名称変更）	三角縁五神四獣鏡／白銅製 短冊形鉄斧	三角縁五神四獣鏡／直径22.0cm，厚さ0.2～0.3cm 短冊型鉄斧／長さ24.8cm，幅頭部5.5cm，幅中央部6.0cm，幅刃部7.0～7.5cm，厚さ1～4cm	潮崎山古墳は芦田川の右岸，新市の平地が見渡される丘陵上にあり，現在は個人の墓所となっている。古墳は，前方後円墳の可能性もあるが，全体的に削平が著しく，墳形は不明瞭である。この古墳から出土したと伝えられる鏡は三角縁五神四獣鏡で，背面中央に円座紐（えんざちゅう）をめぐって，内区に神獣の像を陽刻する。銘帯には六個の方格内に「天・王・日・月・天・王」の文字を右まわり外向に配し，獣文帯によりつないでいる。内区と銘帯との間は段がつき鋸歯文（きょしもん）をめぐらせている。 外区との境にも段がつき，鋸歯文がめぐらされている。更に内側から鋸歯文，波文（はもん），鋸歯文の順に文様帯がめぐり，外縁が三角縁となっている。 鋳出はきわめて良好で錆（さび）や損傷もほとんど見られない，きわめて完好な状態である。また，鉄斧は短冊形である。これら出土品の時期は古墳時代前期（4世紀）であり，大和政権から配布された鏡と考えられている。		関連施設①：広島県立歴史博物館（084-931-2513） 関連施設②：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2881）
県	重要文化財（考古資料）	迫山第一号古墳出土品	さこやまだいいちごうこふんしゅつどひん	274点	福山市神辺町川北 町立歴史民俗資料館	昭62.3.30			迫山第1号古墳は，神辺平野を望む丘陵南斜面に位置し，11基で構成される迫山古墳群中，最大規模の盟主的な古墳である。古墳は，径21.5mの円墳で，横穴式石室である。この石室から武器類，馬具類，装身具類，土器類の計274点の多量の遺物が出土した。これらの中で，県内では3例目の単鳳環頭大刀（たんほうかんどうたち）は，柄と鞘に金銅製の金具，柄頭に金銅製の環頭が装着され，環頭の中央には鳳凰，環体には龍を表現している。その他，銀象眼鍔付大刀（ぎんぞうがんつばつきたち）など，美術工芸品として，また，同一石室からの一括出土品として当時の生活，技術などを知る上で価値が高い。また，環頭大刀は，大和政権から地方豪族を掌握する過程で，政治的・軍事的シンボルとして分与されたものと考えられており，大和政権と備後南部における古墳時代後半期（6世紀～7世紀）の政治的動向を示す貴重な資料である。		
県	重要文化財（考古資料）	石鎚山古墳群出土遺物 【第1号古墳】 斜縁二神二獣鏡　1面 硬玉製勾玉　3箇 琥珀製勾玉　3箇 碧玉製管玉　42箇 鉄やりがんな　2本 鉄刀子　2口 鉄鏃　41本 鉄短剣　1口 銅鏃　5本 【第2号古墳】 内行花文鏡破片　2面 鉄刀子　1口 鉄やりがんな　1本 土師器片　2箇	いしづちやまこふんぐんしゅつどいぶつ	106点	福山市西町二丁目（広島県立歴史博物館保管） 三次市小田幸町（広島県立歴史民俗資料館保管） 広島市西区観音新町四丁目（広島県立埋蔵文化財センター保管）	平5.2.25	第1号古墳／斜縁二神二獣鏡1面，硬玉製勾玉3箇，琥珀製勾玉3箇，碧玉製管玉42箇，鉄[8746]2本，鉄刀子2口，鉄鏃41本，鉄短剣1口，銅鏃5本 第2号古墳／内行花文鏡破片2面，鉄刀子1口，鉄[8746]1本，土師器片2箇		中国の後漢や三国時代の青銅鏡二面を初めとする石鎚山第1号・第2号古墳出土遺物は，各埋葬主体ごとに遺物の組成がやや相違するが，いずれも古式の様相を示す。特に斜縁（しゃえん）二神二獣鏡や定角式鉄鏃（じょうかくしきてつぞく），硬玉製勾玉（こうぎょくせいまがたま）類は前期古墳の特徴的な遺物として貴重である。広島県内における古墳時代前期（4世紀）の一括遺物として各様相を代表する遺物といえる。		
県	重要文化財（考古資料）	田上第二号古墳出土遺物 脚付装飾壺（須恵器）　1点 杯蓋（須恵器）　7点 杯身（須恵器）　7点 高杯（須恵器）　4点 椀（須恵器）　1点 平瓶（須恵器）　1点 提瓶（須恵器）　2点 長頸壺（須恵器）　1点 直口壺（須恵器）　1点 小壺（須恵器）　1点 須恵器破片　一括 鏃（鉄製品）　7点 鎹片（鉄製品）　7点 刀子（鉄製品）　1点 管玉（玉類）　3点 小玉（玉類）　5点	たがみだいにごうこふんしゅつどいぶつ		福山市西町二丁目（広島県立歴史博物館保管）	平10.9.21		脚付装飾壺／器高43.3cm，口径12.4～13.1cm	これらの遺物は福山市芦田町に所在する田上第2号古墳の横穴式石室内から出土した。中でも特徴的な遺物として，脚付装飾壺（きゃくつきそうしょくつぼ）は高さ43.3cmと，県内では珍しい大きさの装飾須恵器（すえき）である。肩部に人物や動物の小さい像や小壷が付けられている。全貌は不明であるが，向かい合う男女の性器を表現した全国的にも類例の少ない人物像が含まれており，子孫繁栄か死者再生の願いを表現したものと考えられている。 装飾須恵器の多くは6世紀中葉から7世紀末までにみられるが，この壷は共伴遺物から6世紀後半と考えられる。		
県	史跡	姫谷焼窯跡	ひめたにやきかまあと		福山市加茂町百谷	昭12.5.28 昭53.10.4（追加指定）			肥前有田や加賀古九谷とともに，色絵磁器を生産した近世前期（17世紀）の窯で，姫谷（標高約430m）の西面した丘陵端に位置し，背後の斜面を削平して窯場を造成している。 昭和52・53年（1977・1978）の発掘調査で，指定地のほぼ中央に，2基の階段式連房登窯が上下に重なって検出された。上層の窯（第2号窯）は，全長16m，房の幅3.1m，焚口（たきぐち）から胴木間（どうこま）をへて6室（一時は7室）があり，房の奥行2.5m，前面に幅60cmの火床を設けている。 下層（第1号窯）は，焚口がやや北にずれるが，上端はほぼ重なり，規模・構造とも第2号窯に共通する。出土陶磁類には，伝世品の種類と合致する白磁色絵のほか，染付，青磁，黒褐釉（こっかつゆう）などを含む。		
県	史跡	熊野の古代土器窯跡	くまののこだいどきかまあと		福山市熊野町草田字深田	昭15.2.23	平安時代，須恵器焼成のための登り窯	長さ3.9m，幅1.35m，高さ1.05m，壁の厚さ9cm，煙出し直径24cm	沼隈半島中央部の南面した傾斜地に位置する須恵器焼成の登窯である。 4基のうちの上手東側の1基（草田第1号窯）は傾斜面に平行して南北方向につくられ，長さ4m，最大幅1.4m，高さ1mで，南端に焚口，北端に直径24cmの煙出しが設けられており，焚口以外は比較的よく原型を残している。窯跡ならびに付近から出土した須恵器は，杯，高台付杯，坩（かん），甕（かめ）などで，平安時代（794～1184）の特徴を示している。 このほか第1号窯の東南に全長2.7mの第2号窯，第2号窯の西に第3号窯，さらにその西土手に第4号窯が位置し，後二者の窯では瓦類をも焼成している。		
県	史跡	鞆七卿落遺跡	ともしちきょうおちいせき		福山市鞆町鞆字西町	昭15.2.23			幕末維新の際京都にあって攘夷（じょうい）討幕のことを策した三条実美（さんじょうさねとみ）らも卿は，朝議一変のため文久3年（1863）一旦長州にのがれ，翌元治元年（1864）7月再び上洛（じょうらく）を企てた。 途中，鞆に2泊したが，蛤御門（はまぐりごもん）の変に長州勢が敗れたことを讃岐（さぬき）の多度津で知り，ただちに長州への途につき，7月23日再び鞆に泊った。この時の宿所がもとの保命酒造酒屋の中村氏宅である。 現在，本宅・土蔵などの建造物は重要文化財（太田家住宅）に指定されている。		関連施設：福山市鞆の浦歴史民俗資料館（084-982-1121）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	平賀源内生祠	ひらがげんないせいし		福山市鞆町後地字大明神	昭15.2.23			蘭学者平賀源内（1729～1779）が鞆の溝川家に寄宿した時，源内焼の製法を伝え，土の神・かまどの神・平賀源内大明神を三宝荒神としてまつれと言い残して去った。この生祠(せいし)は溝川氏が宝暦14年（1764)に祭ったもの。		
県	史跡	菅茶山之墓	かんちゃざんのはか		福山市神辺町川北字網付	昭15.2.23			菅茶山（寛延元～文政10年（1748～1827））は，名は晋師（ときのり），字は禮卿（れいけい），通称は太中，茶山は号である。安那郡川北村（現深安郡神辺町川北）で農業・酒造業を営む菅波樗平（すがなみちょへい）の子として生まれた。19歳の時京都の那波魯堂(なわろどう)に朱子学を学び，天明元年（1781）郷里で私塾を開いた。寛政8年（1796）福山藩は藩立の郷塾とし，公式には神辺学問所と呼ばれたが，一般には廉塾と称した。茶山は朱子学者で詩文に卓越し，藩史福山志料の編集を行った。当時，山陽・南海の諸国から来て学ぶ者が多く，頼山陽も門下生のひとりであった。今日，講堂・寮舎が茶山の居宅とともによく旧観を維持し郷塾としては数少ない遺例である。 なお，茶山は80歳で没し，黄葉山麓にその墓がある。碑文は頼杏坪（きょうへい）の撰ならびに書である。		
県	史跡	亀山弥生式遺跡	かめやまやよいしきいせき		福山市神辺町道ノ上字中川	昭16.3.10 昭23.5.14（名称変更） 昭24.10.28（追加指定）	弥生時代前期（紀元前3世紀～紀元前2世紀ごろ）		神辺平野の中央やや北寄りに標高37mの亀山の独立丘陵があり，遺跡はこの丘陵（東西約250m，南北約350m）のほぼ全域に広がる。なお，史跡指定地はこの丘陵の南半部を中心とする地域である。 過去に昭和32年（1957）の日本考古学協会による発掘調査，昭和56～60年（1981～1985）の広島県教育委員会・県立埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われている。 遺物包含層の下層からはヘラ描きの沈線文や突帯をめぐらす弥生時代前期後半（紀元前2世紀）の土器が中心に出土し，その上層では櫛描き文様の中期前半（紀元前1世紀）の土器が出土し，ヘラ描き文様から櫛描き文様への転換を示す資料として注目される。丘陵上には弥生時代前期（紀元前3世紀～紀元前1世紀）の三重に巡る環濠（かんごう）や，その内側に弥生時代後期（紀元後1世紀～3世紀）の竪穴住居跡や前期～後期の貯蔵穴などの遺構がある。出土遺物は，土器のほか多量の石鏃（せきぞく），刃器，磨製石庖丁，鑿(のみ)形石斧，環状石斧，磨製石斧など，各種の石器が出土している。備後地方の初期の農耕生活を示す遺跡として重要である。 なお，環濠集落内ではあるが，丘陵の北頂部の第1号古墳（径28m）からは割竹形木棺をもつ粘土槨が検出され，三角板革綴短甲（さんかくいたかわとじたんこう）・鉄剣・鉄刀・鉄槍等が出土した。時期は5世紀前半と考えられる。また，南頂部の第2号古墳（径22m）からは箱式石棺が検出され，鉄器片が出土した。時期は5世紀代と推定される。 そのほか，斜面地を中心に古墳時代～中世（3世紀後半～16世紀）の遺物も出土している。		
県	史跡	水野勝成墓	みずのかつなりはか		福山市若松町 賢忠寺境内	昭18.3.26	五輪塔	高さ5.1m	水野勝成は，福山藩の初代藩主で福山城を築城し，芦田川のデルタに城下町を築いた。慶安4年（1651），88歳で没し，菩提寺賢忠寺の境内に葬られた。水野家の墓地は，戦後の都市計画で賢忠寺と分断され，鉄道に沿って北側にある。勝成の墓は巨大な五輪塔で，高さ5.1mである。		
県	史跡	本庄重政墓	ほんじょうしげまさはか		福山市松永町字中ノ町岡 承天寺境内	昭18.3.26			重政は福山藩主水野氏の家臣本庄重紹の嫡子に生まれたが，家督を弟に譲り，兵法を修行した。島原の乱（1637～1638）に戦功を立てた後，高須村に隠棲し新開開発の志を立て，明暦2年（1656）柳津新開を，翌年深津新開を，また万治2年（1659）松永新開を築き，寛文7年（1667）までに新開のすべてを塩浜となし，松永塩田の基礎を作った。延宝4年（1676）70余歳で没し，自ら建立した承天寺に葬られた。本庄神社は重政を祭る社である。		
県	史跡	田辺寺塔跡	でんぺいじとうあと		福山市津之郷町字大満寺	昭18.3.26			福山市の西郊，津之郷町坂部の南に張り出した低丘陵上に位置し，現在の田辺寺の南に接する畑から多量の古瓦類とともに九輪（県重文），風鐸などが出土し，塔跡の存在が推定された。しかし，中心礎石も移動して田辺寺境内におかれており，正確な塔の位置，規模ならびに伽藍配置などいずれも明らかでない。伝承では養老5年（721）開基の和光寺の跡と伝えるが，出土の軒丸瓦，軒平瓦とともに平安時代（794～1184）の特徴を示している。田辺寺のさらに南方の傾斜地から低平地にかかる一帯は，弥生時代から平安時代（紀元前3世紀～12世紀）におよぶ遺構・遺物を出土するザブ遺跡があり，平安時代の緑釉（りょくゆう）陶器や多量の土師器の出土は，和光廃寺との関連を示す資料と言えよう。		
県	史跡	宮脇石器時代遺跡	みやわきせっきじだいいせき		福山市新市町常	昭23.9.17 昭24.8.2（名称変更）	旧石器時代～縄文時代早期		神谷川上流右岸の平地にむけて傾斜する比高約20mの丘陵端に位置し，現在品治別（ほんじわけ）神社の境内となる。縄文時代早期（約9,000～6,000年前）の押型文土器と細石器を出土した遺跡として知られているが，かなり大型の礫（れき）をふくむ包含層で，丘陵上手から二次的に堆積した可能性が高い。 縄文時代の遺物は，山形・楕円・格子目の押型文土器，撚糸文土器，無文厚手土器ならびにそれに伴う石鏃（せきぞく）など縄文時代早期中葉のものが中心である。 縄文時代以前の遺物としては，サヌカイト製の細石核・細石刃ならびに小型のナイフ形石が少量伴出するようで，旧石器時代終末（約20,000～12,000年前）およびそれ以降の過度的様相を示すといえる。		
県	史跡	山の神古墳	やまのかみこふん		福山市駅家町法成寺字田中	昭23.9.17 昭24.8.2（名称変更）	横穴式石室，片袖形	墳丘径14m，高さ4m 石室／長さ6.35m 玄室／長さ4.1m，幅2.9m，高さ3.3m 羨道／長さ2.25m，幅1.26m，高さ1.25m	芦田川中流域の主要古墳の一つで，JR駅家駅の北側丘陵端に位置している。前方後円墳とされているが，円墳とする説もある。墳丘は，径12m，高さ4mを測る。内部主体は横穴式石室で南に開口し，全長6.35m，玄室は長さ4.1m，幅2.9m，高さ3.3m，羨道（せんどう）は長さ2.25m，幅1.26m，高さ1.25mの片袖式で，玄室の側壁を持送ってアーチ状に近い天井部を構成している。出土遺物としては，金銅製丸玉2個分，鉄斧1，金銅製杏葉ならびに鉄地金張りの鐙材片2個分，方形飾金具，鉄針，須恵器・土師器片がある。6世紀中葉前後の古墳と推定される。		
県	史跡	大迫古墳	おおさここふん		福山市駅家町新市字平ケ市	昭23.9.17 昭24.8.2（名称変更）	古墳時代後期，横穴式石室	玄室／長さ5.75m，幅2.5m，高さ2.7m 羨道／長さ6m，幅1.9m，高さ2.1m 奥行11.7m	服部大池北西の，谷状の平地に接した丘陵末端に位置する。周囲は畑や道になって墳丘はほとんどないが，おそらく円墳であったと考えられる。現在内部主体の横穴式石室が露出し，全長11.7m，玄室は長さ5.7m，幅2.5m，高さ2.7m，羨道（せんどう）は長さ6m，幅1.9m，高さ2.1mの両袖式である。両側壁とも巨大な石をたてならべ，横穴式石室の規模としては，二子塚古墳に次ぐ規模をもち，備南の典型的な巨石墳である。玄室内から中空の金製環1，須恵器高杯2が出土しており，6世紀末の古墳である。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	大佐山白塚古墳	おおさやましらつかこふん		福山市新市町中戸手字白塚	昭23.9.17 昭24.8.2（名称変更）	円墳（横穴式石室）	石室／長7.8m，玄室は長さ3.75～3.88m，幅1.9m，高さ2.2m，羨道は長さ約4m	標高188mの大佐山頂上からわずかに南に下った高位置にあり，付近から芦田川中流の眺望は格別である。古墳は円墳（一説に方墳）と見られており，内部主体は巨大な切石を整然と積みあげた横穴式石室で，南向きに開口する。全長7.8m，玄室は長さ3.75～3.88m，幅1.9m，高さ2.2m，羨道は長さ約4mで高さ，幅とも玄室と大差なく，両者の境には両側に柱状の石をたて，それに鴨居状の石が横架し，玄室と羨道を分けている。石と石との間隙には，漆喰がつめられた痕跡がうかがえる。7世紀前半の古墳であろう。付近の傾斜面には，やや小規模の横穴式石室墳が数基分布するが，これには漆喰の使用は認められない。		
県	史跡	神谷川弥生式遺跡	かやがわやよいしきいせき		福山市新市町神谷川字向市内	昭23.9.17 昭24.8.2（名称変更） 昭44.5.27（一部解除）	弥生時代後期		新市町の東部，神谷川と芦田川の合流地点の北側，神谷川左岸に接した標高50mの丘陵上に位置する。弥生時代後期（1～3世紀）の土器を多量に出土することで知られ，「神谷川式土器」として広島県東部の弥生後期土器の標式とされている。昭和43年（1968）には，史跡指定地の上手の丘陵一帯から，竪穴式住居跡7のほか，貯蔵用竪穴などが検出され，集落を構成することが明らかとなった。史跡指定地はこれらの下手にあって，谷を埋めた極めて厚い遺物包含層となっており，下方では縄文時代晩期後半（約2,500年前）の遺物を含んでいる。出土遺物としては，少量の鉄片，砥石のほかは弥生土器で，壺，甕（かめ），鉢，高坏（たかつき）が中心となるが，やや大形の器台もある。		
県	史跡	松本古墳	まつもとこふん		福山市神村町松本字城ノ元	昭24.8.12 令和元.10.21（追加指定） 令和5.6.12（追加指定）	造り出し付円墳	一辺32m，高さ5m	松永湾中央奥の，北から南に向って延びる丘陵の先端部に位置する造り出し付円墳である。従来はこの地域に珍しい方墳とされていたが，昭和51年（1976）の測量の結果，径48～50m，高さ7m，北に幅17m，長さ7m，高さ1mの造出しがあることがわかった。また，内部主体は墳頂部南寄りに竪穴式石室があり，この古墳のものと思われる鉄剣や珠文鏡なども採集されている。石室はもう1基存在する可能性もある。このほか水鳥形土製品が採集されており，5世紀後半の古墳と考えられる。松永湾には，このほか尾道市黒崎山古墳（全長約70mの前方後円墳），大元山古墳（全長約50mの前方後円墳）など前半期の主要な古墳が集中しており，瀬戸内交通の拠点の一つになっていたことが推測される。 令和元年に墳丘北側から東側にかけての部分が、令和5年に墳丘南側の部分が追加指定された。		
県	史跡	猪ノ子古墳	いのここふん		福山市加茂町下加茂小字猪ノ子	昭25.9.16	円墳	直径14m，高さ3m 羨道／長さ約3.8m，幅1.7m，高さ1.25m 石郭／約2.8m，幅約1.1m，高さ0.95m	芦田川中流域の古墳のなかでは，谷奥の傾斜地に立地する。江本神社の南西端に，直径14m，高さ3mの円墳であるが，墳丘の形態・規模とも原形をとどめていない。内部主体は横口式石棺の前に羨道をとりつけた終末期のもので，石棺（せっかん）の長さ約2.8m，幅約1.1m，高さ0.95mで5枚の花岡岩の切石で組合せ，羨道（せんどう）部は長さ約3.8m，幅1.7m，高さ1.25mで，両側壁1枚，天井石2枚からなる。石と石の間隙には漆喰をつめた痕跡がある。7世紀代の古墳と考えられる。横口式石棺を内部主体とする古墳は，飛鳥地方を中心に分布しており，これからみると畿内地方との密接な関連を想定させる。		
県	史跡	神辺本陣	かんなべほんじん		福山市神辺町川北字三日市北側	昭26.4.6 昭26.7.10（名称変更）			本陣は大名宿とも言われ，江戸時代（1603～1867），街道の宿場に置かれた大名・公家・幕府役人などの宿泊所である。建物は書院造で門・玄関・上段の間がある広大な規模であるが，この制度は，明治3年（1870）に廃止された。 神辺は江戸時代に備中（岡山県）矢掛（やかげ）と備後今津の中間に位置する西国街道の宿場町として栄え，その名残りはこの神辺本陣に偲ぶことができる。神辺本陣はもと七日市の東本陣と三日市の西本陣の二軒あったが，西本陣のみが現存している。延享5年（1748）に建てられた本陣の本屋は，御成の間・上段の間・三の間・礼の間・玄関に至るまで参勤交代の諸侯が宿泊した当時の面影をとどめている。なお，屋敷全体を県史跡として指定し，建物は県重文として指定している。		
県	史跡	備後安国寺	びんごあんこくじ		福山市鞆町後地	昭30.1.31			この寺は，もと金宝寺と称し愚谷和尚（ぐこくおしょう）が創建し，師の法燈円明国師（心地覚心）を開山に仰いだという。足利尊氏が元弘の乱（1331年）以来の戦没者の冥福を祈って国ごとに安国寺を設けたとき，この寺を備後の安国寺とした。一時衰退し天正7年（1579）安国寺恵瓊（あんこくしえけい）が再興したが，大正7年（1918）釈迦堂（しゃかどう）の背後にあった本堂が焼失し，現在，釈迦堂1棟（重要文化財）と庭園の一部に石組やソテツの巨樹が残る。		
県	史跡	馬取遺跡	うまとりいせき		福山市柳津町馬取	昭34.1.29	縄文時代中期～後期		松永湾沿岸には，多くの縄文遺跡が分布し，馬取遺跡はその東半部の主要遺跡である。標高10m以下の低平な丘陵端にあり，かつては直接海に臨んでいたと考えられる。遺跡は東西二つの貝塚と南の遺跡包含層からなり，東貝塚では縄文時代中期・後期（約6,000～3,000年前），西貝塚では縄文時代後期，遺物包含層は縄文時代早期から晩期（約9,000～2,300年前）までの遺物を含むが，中心は中期・後期である。縄文土器のほか石鏃（せきぞく）・石匙（せきひ）・石錐（せきすい）などを出土し，古墳時代遺物では，製塩土器が注目される。この遺跡から出土する縄文時代後期末の土器は，「馬取式土器」と称され，瀬戸内海地域の標準土器とされる。現在遺跡の大部分は，土取り工事によって壊され，東貝塚の一部が保存される。		
県	史跡	馬屋原重帯の寿蔵碑	まやはらしげよのじゅぞうひ		福山市駅家町向永谷第5番字堂奥	昭40.4.30	方柱型花崗岩製		重帯は宝暦12年（1762）当地の庄屋の家に生まれ，家業の農業に励むかたわら，史書を読み著作を好んだ。晩年にいたり学問に専念し，自ら塾を開き子弟の教育に当たった。また，福山地方の史書として著名な「西備名区」90巻を独力で著す偉業を成し遂げ，天保7年（1836）没した。この碑は，天保2年（1831）10月門人たちが彼70歳の時，業績を偲んで建立したもので，方柱型花岡岩製である。		
県	史跡	草深の唐樋門	くさぶかのからひもん		福山市沼隈町草深	昭55.1.18			沼隈町の南西部にある草深の南端に「磯新涯」という干拓地がある。福山藩の財政施策として寛文年間（1661～1673）の頃およそ50haの干拓が行われたもので，この際に山南川の川口を堰止め，造成された新涯地への農業用水調整のために造られたのが，草深の唐樋門である。 堤防の東側の一角に，がっしりと石垣を積み上げ，水路に石柱や大きな木の柱によって樋門を組み上げ，巻きろくろによって用水を調整した施設で干拓史の研究上，貴重な産業遺跡である。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	曽根田白塚古墳	そねだしらつかこふん		福山市芦田町下有地字曽根田	昭56.4.17			標高約100mの尾根頂上付近に位置する。墳丘は比較的良好に遺存している。 本古墳の特色を挙げると， 1　主体部の石室に対して封土がきわめて小規模である。 2　石室は全て切石を使用し，しかも極めて巨石を割って天井石・奥壁，側壁等いずれも一枚石か，せいぜい二個で築造し，玄室側壁の一方はわざわざ一枚石に割れ目を入れて左右の均衡を保ち，羨道（せんどう）部側壁も左右相称を意識している。 3　側壁や奥壁と天井石を安定化するため，天井石の接合部にくり込みを入れ，石室を構成する個々の石材の接合部に，しっくいをつめ込んでいる。 4　羨道部より玄室部分がせばめられ石棺状を呈するが，床石はなくて，なお石梁（せっかく）状であり，いわゆる横口式石槨をなしている。 以上の特色をもつことから，この古墳は大化改新以後の薄葬令が意識された古墳終末期（7世紀後半）のものと推測される。		
県	史跡	大坊古墳	だいぼうこふん		福山市神辺町西中条字大坊2番	昭58.11.7	横穴式石室	墳丘／径約14m，高さ約5m， 石室／全長11.2m，玄室長5.32m，奥壁幅1.92m，奥壁高1.91m，羨道長4.4～4.82m，入口幅1.92m，入口高1.92m	神辺平野の北縁，中条の谷の入口付近の丘陵東斜面に立地する。標高50m，比高10m。 墳丘は，長円形をしており，背後には周溝が見られる。円墳と思われるが，方墳の可能性もある。 石室は，切石状の巨大な花崗岩により構築されている。玄室の奥壁は1枚，側壁は左右とも2枚ずつの大石を使用し，羨道の側壁も左右2枚ずつの大石を使用している。玄室のほぼ中央部の床面には，玄室を二分するかのように2個の横長な石が配されている。 本古墳の石室の特徴は，石材を左右対称に整然と用いることである。さらに，玄室と羨道の間の石柱幅を羨道長に含めると，玄室と羨道は同一規模となる点も注目される。 本古墳の構築時期は，石室の形態から終末期（7世紀）と推定される。備南地域の切石使用古墳の出現を考える上で重要である。		
県	史跡	迫山第一号古墳	さこやまだいいちごうこふん		福山市神辺町湯野字迫山	昭61.11.25	迫山古墳群12基の中の1基 片袖式，横穴式石室	墳丘／径21.5m，高さ5m 石室／全長11.6m 玄室／長さ6.2m，高さ2.8m，幅2.5m 羨道／入口幅2m	迫山第1号古墳は，神辺平野を望む丘陵尾根先端の山腹傾斜面に位置し，12基（※）で構成される迫山古墳群中にあって最大の規模である。墳丘は版築状につき固めて盛土しており，径21.5m，高さ5mの円形をなす。墳丘の北面及び西側では浅い周溝がみられ，石室前面の両側には墳裾を示す列石も見られる。副葬遺物は，武器類，馬具類，装身具類，土器類の計274点がある。本古墳は，いわゆる大型横穴式石室墳と言われるものであり，玄室内空間容積44.8㎥，玄室床面積16.0㎡は，それぞれ県内第2，第3位の規模である。また，石室内から出土した多量の遺物は県内では3例目の単鳳環頭大刀や銀象眼鋲付大刀など美術品として価値が高いものだけでなく，同一石室からの一括出土品として当時の生活，技術などを知る上で価値が高い。また，これらは備後南部における古墳時代後半期（6世紀）の政治的動向を解明する上で貴重である。 ※指定当時は11基とされていたが，その後の確認で現在は12基。		関連施設：福山市神辺歴史民俗資料館（084-963-2361）
県	史跡	北塚古墳	きたづかこふん		福山市駅家町服部永谷	昭63.12.26	組合式家形石棺	現存の長さ2.34m，幅1.41m，高さ56cm	芦田川左岸の丘陵裾につくられた服部大池を北に約900mさかのぼると，三つの谷の集まったやや広い平地に至る。この古墳は，この平地を南西に臨む丘陵の端部に位置する。 石棺は，花崗岩製の組合式家形石棺である。蓋は各辺が丸みをおびた長方形の平面をなし，南側の短辺部をわずかに欠損する。長さ2.34m，幅1.41m。本古墳は，家形石棺を直葬するものと考えられ，特にそれが花崗岩製というところに特色がある。花崗岩は硬いため高度な加工技術が必要とされ，広島県では切石造りの石棺式石室を別にすると，組合式のものとしては唯一であり，全国的にみてもそう多くはない。また時期的な面では，備後南部地域で注目されている猪の子古墳を始めとする石棺式石室墳の前段階に位置づけられる。古墳の外表施設は欠失しているが，広島県の特色ある古墳である。		
県	史跡	石鎚山古墳群	いしづちやまこふんぐん		福山市加茂町上加茂字加茂が岡	平4.10.29	円墳 第1号古墳／竪穴式石室2基 第2号古墳／組合式木棺1基，割竹形木棺1基	第1号古墳／直径20m，現存の高さ3m 第2号古墳／直径16m，現存の高さ2m	石鎚山古墳群は，芦田川中流域の加茂川によって形成された扇状地をのぞむ北向きの低丘陵端部に位置し，2基の古墳からなる。 第1号古墳は，直径20m・現存の高さ3mの円墳で2基の竪穴式石室を内部主体とする。第2号古墳は，第1号古墳の南東約20mにあり，直径約16m・現存の高さ2mの円墳で2基の土壙墓を内部主体とする。第1号古墳に見られる列石状葺石（ふきいし）や竪穴式石室の構造などは，古墳時代前期（4世紀）の特徴をよく示しており，この古墳の年代は4世紀半葉から後半の時期と推定される。第2号古墳は，土師器片などから，ほぼ同時期と考えられている。 この古墳群は，芦田川中流域の神辺平野に分布する古墳の中では，初期の古墳群の一つであり，円墳であるが，その構造的特色，副葬品の組合せも古式の様相をよく示しており，備後南部の前期古墳を代表するものである。		
県	史跡	相方城跡	さがたじょうあと		福山市新市町相方	平7.1.23	山城跡，石垣		この城跡は，標高191mの山頂を中心に，石垣を延長120m以上にわたって築いた近世初頭（17世紀前半）の山城である。角の部分には切石を用い，打込接（うちこみはぎ）で築き，西側の虎口には桝形状に屈曲する階段状の箇所もある。安土桃山時代（1572～1600年）における毛利氏が山陽道筋情報を集約し，対応するために，天正15～19年（1587～1591年）の惣国検地後，慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いの直前まで10年近くかけて整備したとみられる重要な城跡である。		
県	名勝	龍頭峡	りゅうずきょう		福山市加茂町山野久賀山国有林80，林班い小班～に小班	昭29.1.26		高さ57m	日本有数の準平原である吉備高原の縁辺部を刻む浸食谷は多いが，みごとな峡谷は少ない。その中で龍頭の滝およびその下流に続く峡谷は実にみごとなものである。この一帯地は千枚岩質粘板岩と石英粗面岩からなり，滝の高度は57mに達し，その直下には大きな滝つぼがあり，さらに峡谷内にも大小の滝や急流が連続している。 龍頭峡の景観に一層の光彩をそえるのは天然林で，常緑広葉樹の優生な林相は，原始林的様相を呈している。動物相も豊かで，しばしば野猿も出没する。夏は龍頭の滝をよじるウナギが望見され，瀬にはカジカの声を聞くことができ，冬はしばしばオシドリも飛来する。		
県	天然記念物	矢川のクリッペ	やがわのくりっぺ		福山市加茂町矢川字カタヤ字オノイシ	昭24.10.28			荒神山（比高170m）の石灰岩の丘は，それ自体の層の傾斜と，基盤の粘板岩の層（荒神山の中腹以下）の傾斜が著しく異なること，及び石灰岩直下の粘板岩が砕かれて，角礫岩となっていることなどにより他から移動してきたものとされている。 クリッペとは，横移地塊の意味で，北方から加わった圧力のため，押しかぶせによって，断層面に沿ってずり動いた石灰岩の地盤がその後の浸食作用によって孤立するようになったものである。このような強力な地塊の運動は，中生代ジュラ紀（約2億800万～1億4600万年前）後に西南日本に起った大造山運動によるものとされている。		
県	天然記念物	上原谷石灰岩巨大礫	かみはらたにせっかいがんきょだいれき		福山市加茂町山野字上原谷	昭24.10.28			この巨大礫は，高さ30m，幅33m，奥行35m以上の巨大な岩塊である。礫の下には大きな洞穴があり，天井から鍾乳石が垂れ，石筍（せきじゅん）も成長している。洞穴の側面や上部は，赤色の凝灰岩質礫岩（ぎょうかいがんしつれきがん）で，この巨大礫は石灰岩の地塊の一部が崩壊し転落したものであろうと推定され，地殻運動の偉大さに感嘆させられる。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	福泉寺のカヤ	ふくせんじのかや		福山市加茂町山野	昭28.10.20			カヤは日本特産の常緑針葉高木で，関東地方から屋久島まで分布し，暖帯の常緑広葉樹林帯と温帯の落葉広葉樹林帯との間に介在する中間帯森林の重要構成要素となっている。本樹の主幹はほとんどまっすぐで，地上約9m付近で初めて小枝を分かち，樹形は独立木の典形的なものである。樹勢は旺盛で，福泉寺の山門をおおうばかりの見事な樹である。カヤとしては県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	竹田のゲンジボタル及びその発生地	たけだのげんじぼたるおよびそのはっせいち		福山市神辺町下竹田	昭33.8.1			下竹田の狭間(はざま)川流域のゲンジボタルは，竹田ボタルと呼ばれ，菅茶山の福山志料などに記されている。毎年5月中旬から6月中旬にかけて乱飛する。現地の人の話によれば，ゲンジボタルの最盛期には，その乱れ飛ぶいわゆるホタル合戦のさまは実に壮観で，通行人の顔に当たるほどであるという。しかし，近年は河川の改修，農薬の散布，流水汚濁等によって減少傾向にある。		
県	天然記念物	安国寺のソテツ	あんこくじのそてつ		福山市鞆町後地	昭36.4.18			ソテツは九州南部から琉球列島に分布する日本特産の裸子植物であるが，関東以西の各地で栽植され巨大な株に生長している名木大木が少なくない。本樹は，安国寺釈迦堂の背後の古い庭園の中にあり，安国寺恵瓊(えけい)が植えたと伝えられる。 本樹は樹高約9mで，二株からなり，第一株は根元より三方に分岐し根回り周囲5.4mにも及び，直立して最も高いものは9mにも達する。第二株は根回り周囲5.6mである。共にソテツでは県内有数の大木である。		
県	天然記念物	仙酔島の海食洞窟	せんすいじまのかいしょくどうくつ		福山市鞆町後地字仙酔島国有地（環境省）	昭41.9.27			仙酔島の地質は，全島中生代白亜紀（1億4300万年前～6500万年前）に噴出した流紋岩及び凝灰質岩により構成されている。本島周辺海岸の断崖には，ところどころに波浪の浸食作用をうけてできた大小の海食洞窟，洞門や離れ島が認められる。しかし，これらの洞窟や洞門の下底は，いずれも満潮水位面より約2～4mの高位にあって，現在は波浪の浸食作用をあまり受けていないものである。したがって，これらの海食洞窟や洞門は，有史時代又はそれ以前に形成されたもので，その後に海水面が低下したか，又は地盤が隆起して，現在に至ったものと推定される。		
県	天然記念物	仙酔層と岩脈	せんすいそうとがんみゃく		福山市鞆町後地字仙酔島国有地（環境省）	昭41.9.27			仙酔島の地質は，主として流紋岩質凝灰岩と流紋岩から構成されている。特に注目すべきは，田ノ浦から彦ノ浦に至る海岸道路沿いで，千人力丘南断崖下に，黒色頁岩・凝灰質頁岩・礫質砂岩などからなる堆積岩が発達する。その下層は，下位の流紋岩質凝灰岩と接し，層厚約15m。かつて小林貞一東大名誉教授により仙酔層と命名され，学界重視の地層である。仙酔層は，仙酔島の地質を構成する流紋岩質火山活動の休止期を表現する堆積岩で，凝灰質岩形成の環境を考察する上に重要である。なお，仙酔層と下位の凝灰質岩とは顕著な断層接触で，この断層に沿い，スペサルト岩として報告された岩脈の貫入が見られる。		
県	天然記念物	福山衝上断層	ふくやましょうじょうだんそう		福山市奈良津町、蔵王町	昭44.4.28			福山衝上断層は，西端福山市木之庄町から，東へ奈良津・蔵王城山を経て，東端は岡山県井原市篠城に至る延長14km続く。蔵王城山の被衝上体の礫層は洪積層なので，断層形成期は洪積世後期（約13万年前～1万年前）と考えられる。本断層は，国指定の船佐・山内逆断層帯と共に，洪積世あるいは現世にかけて起こった中国山地の隆起や瀬戸内低地帯の形成に関する学術上，貴重な資料である。		
県	有形民俗文化財	田尻民俗資料 1 生産・生業に関するもの　724点 2 衣食住に関するもの　243点 3 その他の用具　55点	たじりみんぞくしりょう	1022点	福山市田尻町	昭51.6.29			福山市田尻町は沼隈半島の東端にあり，瀬戸内海に面した半農半漁の生活が営まれた地であるが，収集された用具は，いずれもこの土地での庶民の基礎的な生活文化を示す資料である。 田尻の農家の経営規模はきわめて零細であったため，米麦以外に蘭草（いぐさ），綿などを作り，その加工品製造を副業とするものが多く，そのきわめて多岐にわたる生産生業に関する用具が体系的に集められている。また，漁業は農家の兼業ないし副業として営まれることが多かったが，浅海漁業に特徴的な磯具，釣具および網具が集められている。		
県	無形民俗文化財	はねおどり	はねおどり		福山市沼隈町	昭34.10.30			はねおどりは「沼隈(ぬま〈ま)おどり」とも言われ，沼隈郡一円の氏神の夏祭に若蓮中によって奉納されて来たもので，時には雨乞いや虫送りにもおどられた。跳ね，打ち，おどる，勇壮活発なこのおどりは，水野勝成(みずのかつなり)が福山藩主として入封した時，若者の士気を奮い立たせるのによいとして，大いに奨励したと伝えられる。 鬼と称するおどり手たちは，鬼がしらの音頭で大胴（大太鼓），入れ鼓(こ)（小太鼓），鉦（かね）などのはやしにあわせ，白地のゆかたにすきがけ，白はち巻，黒の手甲（てこう）きゃはん，わらじばきの姿でおどる。神社への道中は，「道行」「さんまいど」「せぐり打ち」「宮巡り」などの拍子に合わせておどり，社前では鬼頭を中心に円陣を作り，「はねおどり」「きょく打ち」などをおどる。		
県	無形民俗文化財	二上りおどり	にあがりおどり		福山市	昭36.4.18			福山城下の夏の風物詩として今日に伝えられる盆おどりで，江戸時代末期（19世紀前半）に江戸詰の福山藩士によって伝えられたものと思われる。 名称は三味線の曲節から出たと思われ，地方(ぢかた)の三味線の二上り，胡弓の三下り，尺八の合奏にのせて，男女とも浴衣の裾をからげ，白足袋にぞうりをはき，男子は鉢巻，女子は手拭で頭部を包んで踊る。手に持った割り竹を鳴らしながら「地方」(ぢかた)の演奏に調子をあわせながら踊るこのおどりは，邦楽の正しい格調をふんだ洗練されたおどりで，みずから踊って楽しむおどりでもある。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	無形民俗文化財	はねおどり	はねおどり		福山市田尻町	昭46.4.30			はねおどりは，江戸時代，備後福山領内の農村に存在していた雨乞おどり，及び礼おどりである。 おどりの内容は，沼隈町山南のはねおどりとほとんど同じであるが，山南のはねおどりに欠けている「鬼太鼓」「鬼の祈願」「鬼おどり」などを含んでいる。また，はねおどりの古い形式は，菅茶山の「御問状答書」の記事や，山口素絢，吉田東里，藤井松林等の近世画家の筆になる「はねおどりの図」，さらには福山領内の古窯「洞山焼」に染めつけられた図柄などによってその大体をうかがうことができるが，田尻のはねおどりは服装，音曲等の点において古形に近いものを伝えている。		
県	無形民俗文化財	本郷神楽	ほんごうかぐら		福山市本郷町	昭51.6.29			横町荒神社の式年である丑歳と未歳の例祭日に奉納される神楽で，備後地方に伝わる荒神神楽の一つである。幕末の学者菅茶山の「御問状答書」にもこの神楽のことが記載されている。 15ある演目のうち「場払い」「神迎え」「神降し」「剣舞」は，儀式舞の伝統を伝え古雅であり，「四本舞」「王子」は問答形式を主とする神楽で，王子神楽の神髄を伝えており，他の演目も比較的よく古型を伝えている。		
県	無形民俗文化財	ひんよう踊	ひんようおどり		福山市本郷町	昭51.6.29			旧暦9月17日，二宮神社に奉納される踊りである。江戸時代には「花踊」と称し，豊作感謝の踊りとして，旧沼隈郡北西部を中心とする農村で踊られていたようであるが，現在は，はやし言葉に語源をもつと思われる「ひんよう踊」といわれ，この地のほか数ヶ所に伝わるのみである。 踊りは，長く白い袖をつけた着物に袴姿，それに梵天（ぼんてん）を持った男たちを中心に，着物に紅襷（べにたすき）をかけ，キリコと呼ばれる花を飾った多角形の燈籠を両手に持った女が外側を囲み，緩調子の歌詞にあわせて踊る，比較的動作の単純な素朴な踊りである。		
県	無形民俗文化財	備後府中荒神神楽	びんごふちゅうこうじんかぐら		府中市 福山市新市町	昭52.9.14			この地方の荒神神楽は，府中市近在の社家に伝承されてきたものを，明治初年に若連中が神楽人として伝授し，現在に至ったもので，7年目毎の年番神楽として一応の体裁を備えている。 この神楽の中心をなす演目は，荒神社の式年神楽において行われるもので，多くは一種の秘伝として取り扱われている。その曲目は，手草舞，剣舞，折数舞，悪魔祓，造花，龍神舞，布乃舞，焼石神事の9曲である。焼石神事は，尺四，五寸大の河原石を窯火で焼き，神酒と塩を注いだのち，両手で持ちあげ台座の石に打ち当て，その砕けた石片の大小により神意を占うというものである。		
県	無形民俗文化財	備後田尻荒神神楽	びんごたじりこうじんかぐら		福山市田尻町	平8.3.18			これは，福山市田尻町本郷に所在する別所・勘定・良（うしとら）の三荒神社の境内に神殿を仮設して，4年ごとの荒神社の式年に当る年（寅・午・戌）の晩秋に舞われる神楽である。 この保存会では，現在，「剣舞」「素盞嗚命（すさのおのみこと）」「皇子」など15の演目が伝承されている。 備後田尻荒神神楽は，神歌が美しく，舞や衣装に古型を伝え，備南地方の荒神神楽の諸特徴を確実に継承し，この地方の地域的特色を示す民俗芸能として貴重である。		
県	無形民俗文化財	蔵王のはねおどり	ざおうのはねおどり		福山市蔵王町	平20.2.28			福山市内の広い範囲で伝えられている「はねおどり（胴鉦）」の一種である。 かつては雨乞い等でも踊られていたが，現在は蔵王八幡神社の秋季例大祭及び前夜祭で踊られている。 「道行」「宮巡り」「せぐり」「打ち込み」の4種類の曲調があり，鉦，諫鼓（かんこ），大胴（おおど）の3種類の打楽器を用いて演奏する。 「せぐり」「打ち込み」では，踊り手は円陣を組み，楽器を奏でながら，名前の由来となった「はね」あがるような所作をまじえて踊る。「打ち込み」では，中唄も唄われる。 古記録から，江戸時代後期（19世紀前半）には，蔵王町周辺で同種のおどりが踊られていたことが明らかであり，隊形や所作も江戸時代後期の形態をよくとどめている。		
国	登録有形文化財（建造物）	旧マルヤマ商店事務所	にほんはきものはくぶつかん こーひーはうす（きゅうまるやましょうてんじむしょ）	1棟	福山市松永町	平8.12.20	木造2階建，疑似石造，寄棟桟瓦葺。	建築面積90㎡	この建物は，マルヤマ商店の本店として建築されたもので，大正11年（1922）に竣工した事務所建築である。設計が長谷川建築事務所，施工が横山菩吉と伝えられている。装飾のあるパラペット，頭部に飾りがある一・二階を通した柱型，玄関ポーチ等に本格的な洋風の意匠が見られる。大正期に地域の技術者によって建てられた本格的洋風建築の好例である。		関連施設：松永はきもの資料館（084-934-6644）
国	登録有形文化財（建造物）	福山市福寿会館	ふくやましふくじゅかいかん	1棟	福山市丸之内一丁目	平9.7.15	木造2階建，瓦葺，昭和10年（1935）～昭和12年（1937）頃建設	建築面積138㎡	昭和10～12年（1935～1937）頃，個人の別荘として建てられた木造，二階建ての洋館である。屋根を急勾配とし外壁をモルタル塗りとした，立ちの高い外観に，昭和初期の洋風の住宅建築の特徴がよく現れている。庭に面した側の妻にある中央部の浮き彫り装飾や窓上部のアーチ形装飾は美しい。		
国	登録有形文化財（建造物）	いろは丸展示館	いろはまるてんじかん	1棟	福山市鞆町鞆	平9.9.3	木造2階建，本瓦葺，江戸時代末期の建設	建築面積211㎡	文化年間（1804～1817）建築の土蔵である。鞆の船着場の正面に妻を見せて建つ2階建ての土蔵である。妻の中央と両脇をなまこ壁とし，腰に下見板を張り，窓の上に小庇を付ける等，正面の意匠はよく整っている。港に面したひとき り目立つ土蔵で，往時繁栄した鞆の様子を知ることができる建物である。 現在では，幕末に紀州帆船と衝突，沈没した「いろは丸」に係る展示館として使用されており，2階部分には鞆町の坂本龍馬宿泊の家で発見された隠れ部屋が再現されている。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財（建造物）	福山誠之館高等学校記念館	ふくやませいしかんこうとうがっこうきねんかん	1棟	福山市木之庄町六丁目	平13.10.29	木造平屋建　入母屋造　桟瓦葺き（さんかわらぶき）	建築面積73.4㎡	福山誠之館は安政元年（1854年）に創設された福山藩校である。昭和8年（1933）に当初の学堂の玄関部分と新築の主屋（しゅおく）を組み合わせ，記念館として開館した。 近世の雄大な唐破風玄関（からはふげんかん）と近代の入母屋造（いりもやづくり）の主屋が巧みに融合した構成で，和風の意匠と造形の連続性をよく示している。		
国	登録有形文化財（建造物）	堂々川一番砂留	どうどうがわいちばんすなどめ	1基	福山市神辺町湯野字トウトウ谷	平18.8.24	重力式石造堰堤，江戸時代後期築造・明治時代増築		芦田川水系堂々川に江戸時代に建設された砂留の中で，最下流に位置する。当初築かれた堰堤の東袖部に当たる。 大型の花崗岩を用いて空石積（からいしづみ），布積（ぬのづみ）で築いた石積壁体の上部に，割石を段状に積み上げる。近世に遡る石積堰堤の遺構として貴重。		
国	登録有形文化財（建造物）	堂々川二番砂留	どうどうがわにばんすなどめ	1基	福山市神辺町湯野字迫山	平18.8.24	重力式石造堰堤，江戸時代後期築造・大正時代前期改築		一番砂留の約180m上流に位置する。西袖部は，壁体を乱積（らんづみ），隅部を算木積（さんぎづみ）とし，その東側は谷積（たにづみ）壁体で水叩（みずたたき）の機能を持つむくりつきの石積躯体を腹付けしている。異なる石積構法に，石積技術の時代的特色を示す。		
国	登録有形文化財（建造物）	堂々川三番砂留	どうどうがわさんばんすなどめ	1基	福山市神辺町湯野字迫山	平18.8.24	重力式石造堰堤，天保3年（1832）頃築造・明治時代増築		二番砂留の約60m上流に位置する。大型の花崗岩をほぼ6分の勾配で階段状に積み，その上部を布積（ぬのづみ）の石垣で嵩上げする。緩やかなアーチ平面で地山に取り付き，外力の一部を端部まで伝える構造とする。		
国	登録有形文化財（建造物）	堂々川四番砂留	どうどうがわよんばんすなどめ	1基	福山市神辺町湯野字迫山	平18.8.24	重力式石造堰堤，江戸時代後期築造・大正時代前期増改築		三番砂留の約130m上流に位置する。西袖部下部の乱積（らんづみ）部分を除き，大正時代以降に築かれる。間知石（けんちいし）谷積（たにづみ）の水通しの前面にむくりつきの石積躯体を付け，左右の袖部を前方に張り出すなど，強固なつくりとする。		
国	登録有形文化財（建造物）	堂々川五番砂留	どうどうがわごばんすなどめ	1基	福山市神辺町西中条字トウトウ谷	平18.8.24	重力式石造堰堤，天保6年（1835）頃築造・明治時代増築		四番砂留の約180m上流に位置する。大型の花崗岩をほぼ6分の勾配で階段状に積み，その上部を布積（ぬのづみ）と谷積（たにづみ）の石垣で嵩上げする。三番砂留と同様に緩やかなアーチ平面を描き，緩いねわたるみをつけた石積形式とする。堰堤の遺構として貴重。		
国	登録有形文化財（建造物）	堂々川六番砂留	どうどうがわろくばんすなどめ	1基	福山市神辺町西中条字トウトウ谷	平18.8.24	重力式石造堰堤，江戸時代後期築造・明治時代増築		芦田川水系堂々川に建設された江戸時代の砂留の中で最大のものである。五番砂留の約m上流に位置する。ほぼ1割の勾配で大型の階段状に積み，その上部を等によりげする。藩政時代に築かれた堂々川筋の砂留の内最大規模で，地域のランドマークとして親しまれている。		
国	登録有形文化財（建造物）	鳶ヶ迫砂留	とびがさこすなどめ	1基	福山市神辺町西中条字トウトウ谷	平18.8.24	重力式石造堰堤，江戸時代後期築造・大正時代増築		五番砂留の上流で，堂々川本川に合流する支流に位置する。大型の花崗岩をほぼ7分の勾配で階段状に積む。平面は緩やかなアーチを描く。急勾配の渓流の上流部に築かれた大規模な砂留で，渓岸の安定に寄与する。		
国	登録有形文化財（建造物）	内広砂留	うちひろすなどめ	1基	福山市神辺町西中条字トウトウ谷	平18.8.24	重力式石造堰堤，江戸時代後期築造・明治時代増築		六番砂留の上流で，堂々川本川の支流に位置する。両袖部は壁体を空石積（からいしづみ），乱積（らんづみ），隅部を算木積（さんぎづみ）とし，水通しに対して前方に張り出す。上部は，谷積（たにづみ）により段状に築く。近世に遡る石積堰堤として貴重。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財（建造物）	信岡家住宅主屋	のぶおかけじゅうたくおもや	1棟	福山市新市町	平20.4.18	木造平屋建、瓦葺、建築面積346㎡		信岡家住宅の中心的建造物で，屋敷地の北寄りに南向きに建つ。段違切妻造，桟瓦葺で，「つし2階」（天井の低い2階）を設けている。外壁は漆喰で塗り込め，妻壁には水切瓦をつけて重厚に仕上げている。桁行は29mに及び，東方を土間，西方を床上部とし，さらにその西側に，西本願寺下賜の仏壇を納める座敷棟が接続している。 当家の備忘録である『操出記録（とりだしきろく）』によれば，文政8年(1825)に茅葺であった旧主屋を火災で失い，その翌年に再建に取りかかったことが知られる。		
国	登録有形文化財（建造物）	信岡家住宅東の蔵	のぶおかけじゅうたくひがしのくら	1棟	福山市新市町	平20.4.18	土蔵造2階建、瓦葺、建築面積66㎡、東門付		主屋の南東方に位置し，西向きに建つ。桁行13m，梁間5.1m，切妻造，本瓦葺の2階建土蔵で，もとは米蔵であったと伝えられる。 建物内部は，南北に分割されており，西面に土間庇を付け，南東端には東門と呼ばれる通用門が接続している。外部は黒漆喰塗で，腰部や水切りの小庇の上部等に海鼠壁をまわして，重厚な造りとしている。 『操出記録（とりだしきろく）』によれば，文政8年(1825)に東の蔵が焼失し，翌文政9年(1826)に主屋とともに再建したことがうかがえる。		
国	登録有形文化財（建造物）	信岡家住宅西の蔵	のぶおかけじゅうたくにしのくら	1棟	福山市新市町	平20.4.18	土蔵造2階建、瓦葺、建築面積66㎡		主屋の西方に位置する。桁行（東西）13m，梁間（南北）5.1m，切妻造，本瓦葺の2階建土蔵で，道具蔵として利用されている。内部は東西の2室に分割され，東から南面に桟瓦葺の庇をまわし，東面と南面に戸口を設ける。腰部や庇上部等に意匠の異なる海鼠壁を配して変化をもたせている。 『操出記録（とりだしきろく）』には，文化5年(1808)に「西之土蔵」を建て替えたという記事が見え，現存建物の中では最古のものとみられる。		
国	登録有形文化財（建造物）	信岡家住宅炭小屋	のぶおかけじゅうたくすみごや	1棟	福山市新市町	平20.4.18	木造平屋建、瓦葺、建築面積27㎡、塀付		主屋の東方，東の蔵の北方に，南向きに建つ。桁行6.9m，梁間3.9m，切妻造，桟瓦葺の平屋建で，外側の南面に材木を置くための棚を設ける。なお，南側には桟瓦葺の土塀が接続している。 『操出記録（とりだしきろく）』によれば，現在の炭小屋の前身建物とみられる「東脇木納屋」が嘉永4年(1851)に焼失したので，すぐ再建したと見える。その後，昭和初期頃に改修されているが，江戸時代の炭小屋としての形態は引き継がれており，当時の生活の様子をうかがうことができる。		
国	登録有形文化財（建造物）	信岡家住宅茶室及び腰掛	のぶおかけじゅうたくちゃしつおよびこしかけ	1棟	福山市新市町	平20.4.18	茶室　木造平屋建、茅葺（銅板仮葺）、建築面積18㎡　腰掛　木造、銅板葺、面積3.5㎡		主屋座敷棟の南側に西向きに建ち，西方に腰掛を配する。入母屋造，茅葺（現状は銅板仮葺）で，6畳大の主室と，背後の3畳大の水屋からなり，南西角には南面して躙口（にじりぐち），西面して貴人口（きにんぐち）を設ける。 昭和初期に遠水流家元の設計で建てられたもので，近代茶室の好例である。当初は長屋門の外に位置していたが，昭和30年頃に現在地に移築された。		
国	登録有形文化財（建造物）	信岡家住宅井戸屋形	のぶおかけじゅうたくいどやかた	1棟	福山市新市町	平20.4.18	木造、瓦葺、面積5.6㎡		主屋の東南方に位置する。桁行（東西）3.1m，梁間（南北）1.8m，寄棟造，桟瓦葺で，西側の石造井戸と東側の石敷の洗い場を覆っている。洗い場側の東面の柱は礎石建とし，南北両面には差物，東西には上下を開けた腰壁を入れて，強度を高めている。 この建物は，『操出記録（とりだしきろく）』の慶応4年(1868)の項に見える「表之井戸上屋」に相当するとみられ，同年5月の大雨で破損し，6月に再建されている。当家の近世における生活様態の一端を示しており，建築年代が判明する井戸屋形としても貴重な例である。		
国	登録有形文化財（建造物）	信岡家住宅中門及び塀	のぶおかけじゅうたくなかもんおよびへい	1棟	福山市新市町	平20.4.18	門　木造、瓦葺、間口1.5m　塀　木造、瓦葺、延長10m		茶室の東南方に東向きに建ち，南北に塀を延ばす。間口1.5m，切妻造，桟瓦葺の1間腕木門で，前後に控柱を建てる。現在では茶室に入るための中門になっているが，江戸時代には福山藩主を迎える「御成門」であったと伝えられる。妻飾りや麻欄間の意匠，板扉の金具等に「御成門」としての格式を感じさせる。 『操出記録（とりだしきろく）』によれば，文化元年(1804)に福山藩主が信岡家に立ち寄っており，その「御成」のための座敷が現在の茶室の場所にあった。同記録には，この座敷が天保4年(1833)に建て替えられたことがうかがえる記述があり，中門もこの時に再建されたものとみられる。		
国	登録有形文化財（建造物）	信岡家住宅長屋門	のぶおかけじゅうたくながやもん	1棟	福山市新市町	平20.4.18	木造2階建、瓦葺、建築面積137㎡		主屋の南方，屋敷の正面に建つ。桁行（東西）31m，梁間（南北）4.0m，入母屋造，本瓦葺の2階建で，西寄りに門口を開け，北面に土間庇を付ける。東端3間半は大壁造の米蔵で，門口の両脇に使用人の居室を配している。 家伝では明治初期の建築とされるが，形式・構造も時代相応であり，部材経年感も江戸時代後期の主屋と比べて新しく，家伝を裏付けている。旧福山府中街道に南面して建つ長大な建造物で，沿線のランドマークとなっている。		
国	登録有形文化財（建造物）	村上家住宅主屋	むらかみけじゅうたくおもや	1棟	福山市今津町	平22.9.10	木造2階建，瓦葺，建築面積152㎡		松永湾を南方に臨む丘陵地に占める敷地の西寄りに位置する。入母屋造桟瓦葺の木造2階建。 北面に深い下屋，東面に入母屋造妻入の玄関を付設。2階は東西に二室並べ，西・南に縁をめぐらし，西室にトコ構えや欄間を飾る。良材を用い，繊細な意匠になる接客座敷。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財（建造物）	村上家住宅衣装蔵	むらかみけじゅうたくいしょうぐら	1棟	福山市今津町	平22.9.10	土蔵造2階建，瓦葺，建築面積48㎡		主屋の北に位置する。切石積基礎上に建つ土蔵造2階建で，桁行9.8m梁間4.9m，東西棟の切妻造本瓦葺とする。 高く竪板を張り，軒まわりを漆喰仕上げとする。1階は二室に分け，各室に出入口を設け，庇をかける。内壁も漆喰で仕上げるなど丁寧なつくりになる。		
国	登録有形文化財（建造物）	村上家住宅米蔵	むらかみけじゅうたくこめぐら	1棟	福山市今津町	平22.9.10	土蔵造2階建，瓦葺，建築面積29㎡		衣装蔵の東方に東西棟で建つ。桁行4.7m梁間4.0mの土蔵造2階建で，南面から東に下屋を設け，南面の一部を室内に取り込み，東は漬物小屋とする。 切妻造本瓦葺，切石積基礎上に建ち，外壁は漆喰仕上げとする。桟瓦葺の下屋が外観に変化を与える。		
国	登録有形文化財（建造物）	村上家住宅納屋	むらかみけじゅうたくなや	1棟	福山市今津町	平22.9.10	木造平屋建，瓦葺，建築面積31㎡		衣装蔵と米蔵を繋ぐ両下造。桁行5.0m梁間4.9mの木造平屋建。内部にトコや戸棚を残すなど，寺子屋に使用された名残を留める。 敷地内側を桟瓦葺で真壁とするのに対して，北外側を本瓦葺，大壁造として，米蔵や衣装蔵と一体で趣のある屋敷構えをつくる。		
国	登録有形文化財（建造物）	村上家住宅井戸屋形	むらかみけじゅうたくいどやかた	1棟	福山市今津町	平22.9.10	木造，瓦葺，建築面積3.8㎡，井戸付		米蔵の東に位置する。桁行2.7m梁間1.4mの切妻造桟瓦葺。切石上に方柱を建て，貫で固め，頂部に梁と桁を架す。一軒疎垂木。 中央に井戸を設け，井戸枠は凸状の花崗岩を組み合わせる。石敷の洗い場を周囲に設ける。近世の生活空間の一端を示す。		
国	登録有形文化財（建造物）	村上家住宅長屋門	むらかみけじゅうたくながやもん	1棟	福山市今津町	平22.9.10	木造平屋建，瓦葺，建築面積72㎡		主屋の東南に東西棟で建つ。入母屋造桟瓦葺で，西面から南面に下屋をまわす。桁行16m梁間3.9mの木造平屋建。 東端を物置，西半部は居室とし，その間に間口3.7mの門口を開ける。門口は東半を壁とする引込み戸をたてる。風格ある屋敷正面をつくる。		
国	登録有形文化財（建造物）	村上家住宅腕木門	むらかみけじゅうたくうでぎもん	1棟	福山市今津町	平22.9.10	木造，瓦葺，間口3.4m，塀付		主屋南面の庭を画する門で，左右に瓦塀を付ける。3.5m間隔で本柱をたて，腕木で軒桁を支持。一軒疎垂木。切妻造桟瓦葺。 本柱間を?（ひさし）で固め，上に井桁の欄間を飾り，下は両脇を土壁とし，中央に引分け戸をたてる。瀟洒な意匠をもち，庭園の景観要素となる。		
国	登録有形文化財（建造物）	村上家住宅石垣	むらかみけじゅうたくいしがき	1基	福山市今津町	平22.9.10	石造，延長77m		敷地の南面から西・北面にかけて築かれる石垣で，高さは南西角で4.2m，北西角で2.3mを測り，総延長76mに及ぶ。 打ち込み矧ぎの乱積とし，各角は算木積とする。一部に明治期の火災の痕跡を残す。城郭のような威容を誇る敷地構えをつくり上げている。		
国	登録有形文化財（建造物）	福山市福寿会館本館	ふくやましふくじゅかいかんほんかん	1棟	福山市丸の内	平24.2.23			福山城北側の敷地北寄りに建つ。木造平屋建，建築面積385平方メートル，入母屋造桟瓦及び檜皮葺で，正面に唐破風造檜皮葺の玄関を構える。21畳主室と次の間に縁を廻らし，主室は大振りで上質な座敷飾りを備える。庭園越しの天守眺望を意図した和風住宅。		
国	登録有形文化財（建造物）	福山市福寿会館西茶室	ふくやましふくじゅかいかんにしちゃしつ	1棟	福山市丸の内	平24.2.23			本館西側に渡廊下を介して建ち，木造平屋建，建築面積67平方メートル，寄棟造桟瓦及び檜皮葺である。天守を望む10畳主室の西側に3畳台目茶室，北側に2畳中板付茶室を配し，水屋を舟底天井とする。本館との調和がはかられた，瀟洒なつくりの数寄屋建築。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財（建造物）	福山市福寿会館南茶室	ふくやましふくじゅかいかんみなみちゃしつ	1棟	福山市丸の内	平24.2.23			池を挟んで本館の南側に建つ茶室で，望城亭とも呼ばれる。木造平屋建，建築面積78平方メートル，桟瓦及び檜皮葺で，3畳台目の小間と8畳の広間を庭園側に配し，裏手に水屋などをおく。京都の数寄屋大工笛吹嘉一郎の手になる，意匠洗練で開放的な近代茶室。		
国	登録有形文化財（建造物）	福山市福寿会館東蔵	ふくやましふくじゅかいかんひがしぐら	1棟	福山市丸の内	平24.2.23			本館北西側に廊下で接続する内蔵である。桁行9.9メートル梁間6.0メートル，土蔵造2階建，切妻造妻入で，本瓦葺の屋根に起りをもたせる。布石積の基礎上に建ち，外壁は漆喰塗で各階の腰に海鼠壁を廻す。建ちの高い土蔵で，敷地北西の景観を引締める。		
国	登録有形文化財（建造物）	福山市福寿会館西蔵	ふくやましふくじゅかいかんにしぐら	1棟	福山市丸の内	平24.2.23			本館の北東に位置し，桁行6.9メートル梁間3.9メートル，土蔵造2階建，切妻造本瓦葺である。布石積の基礎上に建ち，外壁は漆喰塗で各階の腰に海鼠壁を廻す。1回南半は土間で，主屋台所に通じる西側に出入口を開く。邸宅内で日用に供した土蔵の一例。		
国	登録有形文化財（建造物）	福山市旧佐波浄水場配水池	ふくやましきゅうさばじょうすいじょうはいすいち	1棟	福山市佐波町	平25.3.29			福山市旧佐波浄水場は，福山市街の上水確保のため大正14年に竣工された浄水場施設である。配水池，浄水井，門から成る。福山市の水道史を物語る建物である。 配水池は，浄水場の東端に位置する。コンクリート造及び煉瓦造，南北32メートル東西29メートルで，深さ3.8メートルの池2基を南北に配する。東西面の中央を塔状にして点検用の出入口を開き，東面の上部に記念額を掲げる。		
国	登録有形文化財（建造物）	福山市旧佐波浄水場浄水井上屋	ふくやましきゅうさばじょうすいじょうじょうすいせいうわや	1棟	福山市佐波町	平25.3.29			配水池の西側に位置する浄水井の東側中央に建つ。煉瓦造及び石造，平屋建，東西4.1メートル南北3.0メートル，高さ2.6メートルである。東面の中央に出入口，残る3面の中央に縦長窓を開く。簡素ながらも丁寧なつくりで，浄水場の景観に趣を添える。		
国	登録有形文化財（建造物）	福山市旧佐波浄水場門	ふくやましきゅうさばじょうすいじょうもん	1棟	福山市佐波町	平25.3.29			浄水場の東面北寄りに開く。石造及び煉瓦造，高さ2.4メートルの門柱を2.8メートル間隔で配する。その北側に1.1メートル間隔で小振りの脇柱を立てて通用門を設ける。煉瓦と石を交互に積んで縞状にした特徴的な外観をもち，浄水場施設の正面を整える。		
国	登録有形文化財（建造物）	福山市旧山野村役場	ふくやましきゅうやまのむらやくば	1棟	福山市山野町山野	H26.4.25	木造2階建，桟瓦葺	建築面積216.71㎡	木造二階建の入母屋造桟瓦葺建造物で，三面に下屋を廻す。大棟側面の板瓦には「波に鯉」の図様を表し，鬼瓦にも意匠を凝らす。内部は一階が旧執務室で，二階は旧議場で南端を吹抜とする。化粧屋根裏で垂木は半割丸太とする。県東部では現存最古の役場庁舎である。明治25年に建築され，昭和53年の改修以降，民俗資料館として使用されている。		関連施設：山野民俗資料館（084－974－2851）
国	登録有形文化財（建造物）	南禅坊本堂	なんぜんぼうほんどう	1棟	福山市鞆町	H26.12.19			本堂は，鞆町西側の寺院群内に構える南禅坊境内に東面する。桁行16メートル，梁間17メートル，入母屋造（いりもやづくり）本瓦葺（ほんがわらぶき）で，一間の向拝（こうはい）を付す。 内部を内陣，余間，外陣（げじん）に区分し，前面に吹放ちの広縁（ひろえん），三方に落縁（おちえん）を廻す典型的な真宗本堂平面で，要所に時代相応の発達した装飾を見せる。		
国	登録有形文化財（建造物）	南禅坊山門	なんぜんぼうさんもん	1棟	福山市鞆町	H26.12.19			一間一戸（いっけんいっこ）四脚門（しきゃくもん，よつあしもん）の上部に，一間四方で入母屋造本瓦葺の上層が増築され，鐘楼を吊る構造。※　現在梵鐘は無い。福山藩の命令により安政5（1858）年に供出されたことが寺の文書『梵鐘一件記録』から分かっている。 懸魚（げぎょ）に文化7（1810）年の墨書があることから，上層は1811年の第12回通信使を迎える予定で増築工事を行ったものと考えられている。 木部には全体に弁柄が塗られ，上層正面及び背面に火灯窓（かとうまど），両側面に円窓がある。隅棟（すみむね）の鬼瓦にそれぞれ異なる形態の猿が彫られているのも特徴的。 軒先の強い反りなど随所に，異国情緒を漂わせ，朝鮮通信使寄港地である鞆の浦の情景を彩る。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財（建造物）	林家住宅主屋	はやしけじゅうたくおもや	１棟	福山市鞆町鞆	令6.3.6	木造二階建、瓦葺	建築面積215㎡	鞆城跡北東の角地に位置し、かつて醸造業や廻船業で栄えた商家の町家。二階壁面は広い縁取りの木瓜形（もっこうがた）虫籠窓を並べて腰を海鼠壁とするなど豪壮な意匠の町家。		明治中期
国	登録有形文化財（民俗文化財）	鞆の鍛冶用具及び製品	とものかじようぐおよびせいひん	567点	福山市鞆町　福山市鞆の浦歴史民俗資料館	令3.3.11			鞆の鍛冶用具及び製品は、古来より潮待ちの港で知られた広島県福山市鞆町において、船具などの鍛造に使われた用具とその製品である。鞆の鍛冶職人の間では、近世以来の家内労働的な徒弟制度が昭和初期まで続けられ、親方と弟子がともに鍛造したが、本件はその当時の手作業による用具を数多く収集している。鍛冶用具は、鞆の主要製品であった鐇や船釘などを製作するために、昭和の中頃まで使われていた用具が一式揃っている。鉄を熱処理する火床に風を送る鞴、作業台の金床、鉄を挟んで打つ箸や鎚、仕上げ道具の鑢やキサゲなど、用途ごとに大小各種が揃う。ほかにも漁網の錘の鋳型や備中鍬の爪なども収集されており、船具類の鍛造にとどまらない製作活動の幅広さが窺える。代表的な製品は、錨と船釘である。錨は四爪錨や二爪の唐人錨などで、船釘は縫釘、通釘、包釘、貝折釘などの木造船の建造用途によって異なる大小各種が揃う。昭和の中頃までに製作された各種の製品が網羅的に収集されている。		
国	選定保存技術	手織中継表製作	ておりなかつぎおもてせいさく		福山市沼隈町下山南	令和5年（2023）10月18日（選定・保持者認定）			中継表は畳表のひとつで、様々な文化財建造物の畳に使用されている。従来の畳表は１本の長い藺草で織った引通表が用いられていたが、近世には2本の藺草を両端から通して中間で繋ぐ中継表が考案された。これにより、短い藺草でも畳表の材料として使えるようになった。またこの技法では太さが均一な藺草の中間部分のみを使用することにより、良質な畳表の製織が可能となった。 手織中継表の製作は、(1)手織機に麻を結いだ縦糸を掛け、両端から藺草を通す、(2)藺草を通す度に機のコテが前後に傾き、縦糸が2本ごとに前後にずれることで交互に織る、(3)20回ほど藺草を通したら、コテで強く叩き締める、(4)これを繰り返すことで１枚の中継表を織り上げる、といった工程をたどる。皺や斑が出ないように一様に織ったり、材料となる藺草を選別したりするには熟練を要する。畳需要の減少や動力織機への移行などで、手織中継表の織手は数人を残すのみとなり、技術の保存の措置を講ずる必要がある。 保持者の来山淳平氏は、手織中継表製作に精通し、その卓越する技術は高い評価を得ている。また手織機の調整、製作や縦糸の製作など、周辺技術も熟知している。		